

第59回関東甲信越静地区造形教育研究大会

群馬大会

第56回群馬県造形美術教育研究大会前橋大会
前橋市小学校教科別研究会（図画工作）

報告

大会テーマ

「出会い
かかわり
つながる造形」



原小6年「ひらいてみると」

目 次

◇ 目次	2
◇ 大会日程	3
◇ 実行委員長あいさつ	4
◇ 全体会次第	5
◇ あいさつ・祝辞	6
◇ 基調提案	10
◇ 大会宣言	12
◇ 記念講演	14
◇ 前橋市図工美術作品展の様子 全体会場・受付等の様子	19
◇ レセプション	21
◇ 公開保育・公開授業一覧	22
公開保育 前橋市立おおご幼稚園（年少・年中・年長）	23
公開授業 前橋市立原小学校（2年・3年・6年）	24
公開授業 前橋市立第六中学校（3年）	30
公開授業 前橋市立荒砥中学校（1年）	32
公開授業 群馬県立前橋東高等学校（1年）	33
◇ 校園種別分科会一覧	34
1 a 分科会 幼稚園 群馬県	36
2 a 分科会 小学校 東京都	38
2 b 分科会 小学校 栃木県	40
2 c 分科会 小学校 群馬県	42
3 a 分科会 小学校 山梨県	44
3 b 分科会 小学校 新潟県	46
3 c 分科会 小学校 静岡県	48
3 d 分科会 小学校 群馬県	50
4 a 分科会 小学校 長野県	52
4 b 分科会 小学校 埼玉県	54
4 c 分科会 小学校 群馬県	56
5 a 分科会 中学校 茨城県	58
5 b 分科会 中学校 東京都	60
5 c 分科会 中学校 群馬県	62
6 a 分科会 中学校 千葉県	64
6 b 分科会 中学校 神奈川県	66
6 c 分科会 中学校 群馬県	68
7 a 分科会 高等学校 群馬県	70
◇ 群馬大会実行委員会組織	72
◇ 編集後記	

大会日程

第1日目

令和元年11月14日(木) 全体会・記念講演

<昌賢学園まえばしホール(前橋市民文化会館)>

12:00	12:30	13:30	14:00	16:00	18:00
受付	都県代表者会議 昌賢学園 まえばしホール	全体会 受付	全体会・記念講演 前橋市図工美術作品展 (展示ホール10:00~16:00) 昌賢学園まえばしホール	移動	レセプション 前橋テルサ

第2日目

令和元年11月15日(金) 公開保育・授業・研究協議・分科会

<前橋市立おおご幼稚園> 「活動を楽しみ みんなとつながる造形」

9:00 9:25 9:30 11:00 11:15 12:15

受付	移動	公開 保育	休憩	第1 分科会	閉会
----	----	----------	----	-----------	----

*群馬県国公立幼稚園教育研究会が運営

<前橋市立原小学校> 「材料とかがわり 友達とつながる造形」

9:00 10:00 10:15 10:25 11:10 11:20 12:00 13:00 13:30 16:00

受付	学校説明等	移動	公開 授業 低中高	休憩	授業 研究会 低中高	昼食・ 移動	分科会 打合せ	第2・3・4分科会 各分科会の提案協議時間 a 13:30-14:00 b 14:10-14:40 c 14:50-15:20 d 15:30-16:00
----	-------	----	-----------------	----	------------------	-----------	------------	--

*前橋市教科別研究会(図工)を兼ねる。

<前橋市立第六中学校・前橋市立荒砥中学校>

「素材とかがわり 社会とつながる造形」

9:00 9:50 10:00 10:50 11:10 12:00 13:00 13:30 16:00

受付	移動	公開 授業	休憩	授業 研究会	昼食・ 移動	分科会 打合せ	第5分科会(第六中) 第6分科会(荒砥中) 各分科会の提案協議時間 a 13:30-14:00 b 14:10-14:40 c 14:50-15:20
----	----	----------	----	-----------	-----------	------------	--

<群馬県立前橋東高等学校> 「社会とかがわり 明日につながる造形」

9:00 9:40 9:50 10:40 10:50 11:40

受付	移動	公開 授業	休憩	第7 分科会	閉会
----	----	----------	----	-----------	----

*群馬県高等学校教育研究会美術・工芸部会が運営

あいさつ



関東甲信越静地区造形教育研究大会群馬大会
実行委員長
佐波郡玉村町立玉村小学校 校長

吉崎 匠

新たな時代「令和」のもと、第59回関東甲信越静地区造形教育研究大会群馬大会が、造形教育に関わる多くの先生方や関係の皆様方の参会のもと、水と緑と詩のまち前橋市において、盛大に開催できましたこと感謝申し上げます。

群馬大会では、大会テーマを「出会い かかわり つながる 造形」とし、研究実践を進めてまいりました。

1日目の記念講演では、東良雅人視学官様、岡田京子教科調査官様のお二人から「図画工作科・美術科における主体的・対話的で深い学びの視点に立った授業改善」と題して講演をいただきました。講演の冒頭では、東良先生より「図画工作や美術は、自分の世界観を抱ける教科」であること。また、岡田先生より「今することをしっかりとすることが大事」であることが示され、「深い学び」と「造形的な見方・考え方」等との密接な関係について大変わかりやすくお話しいただきました。

2日目の各会場につきましては、前橋市郊外の不便な場所にもかかわらず、おご幼稚園、原小学校、第六中学校、荒砥中学校、県立前橋東高等学校には、たくさんの参加者がお越しいただき、特に原小学校は300名を超え、両中学校も90名近くの参加者となり、公開授業や分科会が盛況となりました。参加者の皆様方の造形教育への興味・関心の高さが実感できた素晴らしい大会となったことに感謝しています。

今回の群馬大会において、これからの造形教育に求められる「主体的・対話的で深い学び」の姿が少しでも具現化されたのではないのでしょうか。

最後になりますが、本研究大会を開催するに当たり、文部科学省、群馬県教育委員会、前橋市教育委員会をはじめ、教育関係諸団体より多くのご指導ご支援をいただき、盛大に開催できましたことに心より感謝申し上げます。また、本研究大会に御参集のたくさんの皆様方に厚く御礼申し上げます。

令和元年11月14日(木) 全体会 次 第

1	開 会	司会	栗原 博志 丸橋 覚
2	主催者あいさつ 関東甲信越静地区造形教育連合理事長 関東甲信越静地区造形教育研究大会群馬大会実行委員長		飯澤 公夫 吉崎 匠
3	来賓祝辞 群馬県教育委員会教育長 前橋市教育委員会教育長		笠原 寛 塩崎 政江
4	来賓紹介		
5	基調提案		間々田 博
6	大会宣言		内藤 武志
7	次期開催県あいさつ(千葉) 第60回関東甲信越静地区造形教育研究大会千葉大会代表		星 秀光
8	閉 会		蜂須賀克明

記念講演

「図画工作科・美術科における 主体的・対話的で深い学びの視点に立った授業改善」

講演者紹介

岡田 京子(おかだ きょうこ)

文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官
文化庁参事官(芸術文化担当)付教科調査官
国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部教育課程調査官



プロフィール

東京都公立小学校教諭, 主任教諭,
文部科学省学習指導要領解説図画工作編作成,
評価規準の作成のための参考資料作成,
特定の課題に関する調査などに携わり, 平成23年より現職。
著書に,
「成長する授業」「子どもスイッチON!! 学び合う高め合う造形遊び」
「世界一わかりやすい! 会話形式で学ぶ, 図画工作科の授業づくり」
「小学校図工 指導スキル大全」 などがある。

東良 雅人(ひがしら まさひと)

文部科学省初等中等教育局視学官
(併任)文化庁参事官(芸術文化担当)付教科調査官
文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官
国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部教育課程調査官



プロフィール

昭和62年, 京都市立中学校美術科教諭,
京都市立小学校図画工作科専科教員
平成14年, 京都市教育委員会指導部学校指導課 指導主事
平成17年, 中央教育審議会初等中等教育分科会
教育課程部会芸術専門部会委員
平成23年, 国立教育政策研究所 教育課程調査官,
(併)文部科学省初等中等教育局教育課程課 教科調査官
平成30年, 文部科学省初等中等教育局 視学官
(併)文化庁参事官(芸術文化担当)付教科調査官

主催者あいさつ

関東甲信越静地区造形教育連合 理事長
八王子市立陶鎔小学校 校長 飯澤 公夫

本日、多くの皆様にご参加頂き、第59回関東甲信越静地区造形大会が盛大に開催されましたことを大変嬉しく思っております。地元の皆様の造形教育に関わる取組に深く敬意を表します。また、文部科学省初等中等教育局視学官 東良雅人様、文部科学省初等中等教育課程課 教科調査官 岡田京子様をはじめ、多くのご来賓の皆様のご臨席を賜り、感謝申し上げます。ありがとうございます。



さて、今年の6月に経済産業省から、提言の形として出された未来の教室ビジョンの中に、学びのスチーム化（STEAM化）というのがあります。従来の科学技術や論理的思考力を育む理科、算数や数学を中心とした理系の学びに、より幸福な人間社会を創造する上で欠かせないデザイン・アートをこの学びに取り入れ、循環させ、新たな学びを構築するというものであります。中心に位置づけられるデザイン・アートの重要性が、今まで以上に注目されています。美術は答えのない学びだと言われていますが、一つの正解を求めるのではなく、よりよい答えを追求していくこと、そのことがこれからの複雑な現代社会に生きていく生き方そのものではないかと思えます。本当の意味での生きる力を鍛える教科、それが図工・美術の造形ではないでしょうか。私は、小学校に籍を置いています。来年、小学校は次期学習指導要領が完全実施を迎えます。そこでは、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善が求められています。全ての教科において図工・美術の造形的な見方・考え方が示され、わかりやすい教育課程になっております。そして、そこでの共通のキーワードは生きる力を如何に具現化していくかであり、何のために学ぶのかを各教科の学ぶ意義を共有しながら、授業の創意工夫を図っていく必要があります。この前橋で開催される研究大会が、これからの学習指導要領の具体的な授業の提案となっております。ご参会の皆様は、この二日間の学びをそれぞれの地区に持って帰って頂き、関東甲信越静地区に限らず、全国に成果を発進してほしいと願っています。

終わりにになりましたが、重ねて今日までにご準備頂きました前橋や群馬県の皆様にご感謝申し上げますとともに、皆様方の更なるご活躍を祈念いたしまして、私のあいさつとさせていただきます。

主催者あいさつ

関東甲信越静地区造形教育研究大会群馬大会 実行委員長
佐波郡玉村町立玉村小学校 校長 吉崎 匠

新たな時代「令和」のもと、第59回関東甲信越静地区造形教育研究大会群馬大会が、造形教育に関わる多くの先生方や関係の皆様方のご尽力のおかげで、このように盛大に開催できましたこと心より感謝申し上げます。本日は、群馬県教育委員会笠原寛教育長様、前橋市教育委員会塩崎政江教育長様の御臨席を賜り、誠に感謝申し上げます。また、全体会の後の本日の記念講演では、東良雅人視学官様、岡田京子教科調査官様お二人を講師にお迎えし、「図画工作科・美術科における主体的・対話的で深い学びの視点に立った授業改善」と題して御講演をいただきます。これからの造形教育の在り方について先見的で有意義な示唆を頂けるものと期待しております。



さて、群馬大会ではこれまで、幼稚園、小学校、中学校、高等学校が、大会テーマ「出会い」「かかわり」「つながる」を視点に、造形活動を推進してまいりました。その中で、幼児・児童・生徒達が、達成感や充実感、自己有用感を高めるとともに、視野を広げ、志高く、素晴らしい未来を創り出していく資質や能力を育てていくものと考え、研究実践を重ねてまいりました。明日の公開保育や公開授業では、これまでの実践の成果の一端をご確認頂けるものと信じております。また、各分科会においては、新学習指導要領に示されている三つの柱「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力・人間性」それらを踏まえ、造形教育における「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた多くの研究実践が提案されております。明日の分科会では、活発な研究協議がなされることを通して、これからの造形活動における「主体的・対話的で深い学び」の姿が少しでも具現化され、ご参会の皆様方で共有できることを期待しております。

最後に、今回の群馬大会を開催するに当たり、文部科学省、群馬県教育委員会、前橋市教育委員会をはじめ、多くの教育関係者の皆様方により、手厚いご指導ご支援をいただきましたことに深く感謝申し上げます。重ねて、群馬大会に御参会いただきましたたくさんの皆様方に感謝を申し上げ、簡単ではございますが、開催に当たっての挨拶とさせていただきます。

祝 辞

群馬県教育委員会 教育長 笠原 寛

まず、第59回関東甲信越静地区造形教育研究大会群馬大会及び第56回群馬県造形美術教育研究大会が、群馬県前橋市を会場として、このように盛大に開催されますことを心からお祝い申し上げます。また、皆様には造形教育の充実のため、日々の教育活動にご尽力いただいておりますことに改めて深く感謝申し上げます。学校教育においては、昨年度幼稚園で新学習指導要領が全面实施となりました。来年度から小学校から順次、全面实施となります。幼稚園では、表現の領域において生活の中でいろいろな素材に親しみ、様々な形、色、手触り、動きなどに気付いたり、感じたりしながら豊かな感性や表現する力を養い、創造性を培うことが求められています。この幼稚園で育てた資質能力を小学校の図画工作で、そして中学校の美術、高等学校の美術や工芸につなげ、一貫して育てていくことが重要であると考えております。今回、幼稚園から高等学校の先生方に県内外から多数お越しいただき、「出会い かかわり つながる造形」の大会テーマの下2日間に渡り、記念講演を始め、公開保育、公開授業、分科会が精力的に開催されますことは、幼稚園から高等学校までのつながりを意識した造形教育の改善、充実のために誠に意義深いものと考えております。本大会を通して、ご参会の皆様が活発な協議を行い、各都県における造形教育のよりよい方向性が、生み出されることを期待申し上げます。皆さんにおいでいただきました本県には、尾瀬をはじめとする豊かな自然や世界遺産に登録された富岡製糸場と絹産業遺産群、ユネスコ世界の記憶に登録された上野三碑などがあり、また、数多くの温泉地や豊富な農畜産物にも恵まれております。お時間の許す限り魅力ある群馬の自然や歴史文化、また味覚に触れていただきたいと思います。



結びに、本大会を開催するに当たりご指導、ご支援を賜りました文部科学省をはじめ、ご理解とご協力をいただきました関係都県の皆様方及び本大会の企画・運営に当たられた本県関係者の方々に対しまして、深く敬意を表するとともに、本造形教育連合のご発展を祈念申し上げ、祝辞といたします。

祝 辞

前橋市教育委員会 教育長 塩崎 政江

このたび第59回関東甲信越静地区造形教育研究大会群馬大会が、前橋市を会場に多くの先生方をお迎えし、盛大に開催されますことを心からお慶び申し上げます。

本市は雄大な赤城山の裾野に広がり、利根川や広瀬川が市内を流れ、詩人萩原朔太郎や作曲家井上武士を輩出した「水と緑と詩（うた）のまち」です。兩人とも恵まれた自然を背景に、研ぎ澄まされた感性を豊かに働かせて、心の琴線に触れる素晴らしい作品を世に送り出しました。



本市では、先人が築いてきた文化を継承・発展させつつ、「県都前橋 教育のまち」の実現に向け、「まえばし学校教育充実指針」を策定し、「多様な人と協働しながら、主体的・創造的に活動する子供」の育成に向けた教育活動を推進しております。また、造形教育においても、子供たち自身が造形的な見方や考え方を働かせ、生活や社会の中の美術や美術文化と豊かに関わる授業づくりに取り組んでおります。

本市において、「出会い かかわり つながる造形」を主題に掲げている本大会が開催されますことは、児童生徒が学ぶことの楽しさや多様な人と関わりながら活動する喜びを実感できる教育活動を目指す上でも大変意義深いことであると感じております。また、本大会が本市はもとより参加される先生方同士が出会い、かかわり、つながるための貴重な機会として、実り多い大会となることを期待しております。例年行っている子どもたちの図工美術作品展と先生方の作品展を、今日のこの関プロ大会に合わせて、このホールの一階で開催しています。また、まち中の美術館、「アーツ前橋」では、多様な芸術作品と身近に接することができます。参加者の皆様にも是非、ご鑑賞いただけますようお願いいたします。

終わりに、本大会の企画・運営にご尽力いただいた方々に対しまして、深く敬意を表しますとともに、関東甲信越静地区造形教育連合の益々のご発展を祈念して、お祝いの言葉といたします。

基調提案 群馬大会テーマ

「出会い かかわり つながる造形」

IT化，グローバル化の急速な進展が，将来を見据える困難さを強めている現在。しかし，不安なことばかりではないでしょう。近い未来には，新たな社会のもとで，様々な環境が生まれているに違いありません。その新しい環境をつくりだすために，今の子どもたちに身に付けさせたい資質・能力は何なのでしょう。

これからの教育は「将来の予測が難しい社会の中でも，伝統や文化に立脚した広い視野を持ち，志高く未来を創り出していくために必要な資質・能力を子供たち一人一人に確実に育む学校教育」を実現することが必要です。「日本文化を理解して継承したり，異文化を理解し多様な人々と協働したりできるようにすること」が大切です。

図画工作・美術という教科の特性から，実際にものに触れて感じ取ることや体を使って体験する活動，言語以外の方法（形・色など）を用いた言語活動，形・色などにより表現されたことを捉えて言語化する活動などを行うことも大切にしたいことは言うまでもありません。

そこで，本大会のテーマを…「出会い かかわり つながる造形」としました。

「出会い」とは，人や材料，題材との出会いを意味しています。友達や家族，先生，造形活動にかかわる人（芸術家，職人，材料の専門家など），地域の人，外国の人など，様々な人が想定されます。それらと出会うことにより，新しい知識や技術を得たり，自分とは異なる見方・考え方を知ったり，人の手によって生み出された造形の素晴らしさに気付いたりしていきます。

「かかわり」とは，身近にある様々な材料に直接触れ，その感触を楽しみ，形や色のおもしろさに気付き，加工に必要な用具や加工方法を知り，実際に試し確かめながら加工してみる。そうした体験を重ねることによって，材料や素材の特性を理解し，その特性を活かして想いを巡らせながら，試行錯誤していきます。その思考の過程や過程を経て，自分らしい表現をすることができるようになるでしょう。

「つながる」とは，表現の過程で，表現活動そのものを楽しみ，その喜びや嬉しさを他者や環境に発信したり受信したりし始めます。出会った人達や身近な人達と，地域の人達と，社会や環境



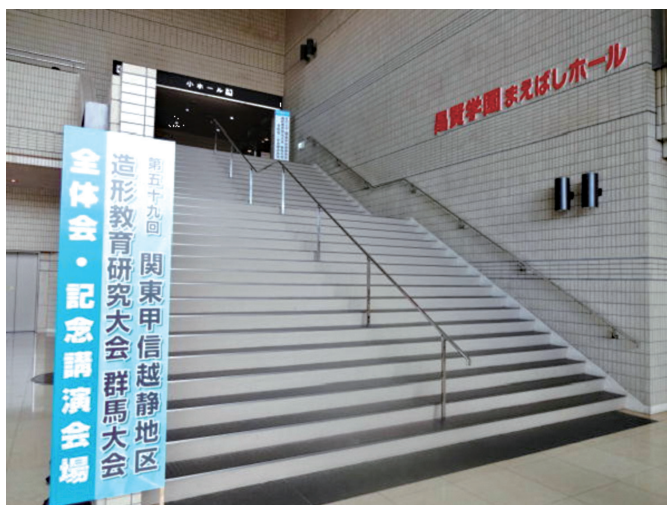
と、つながっていきます。このことは、造形活動の面白さや造形表現の美しさを実感することにもつながることでしょう。

こんなつながりをさらに強めていくためには、表現をどのような場で見せるか？どのように発信し伝えていくか？今の社会にどのようにアプローチさせるのか？私たちは、つなげていくために様々な方法を工夫します。

このような造形活動を通して・・・「出会い」「かかわり」「つながる」ことで、子供たちは達成感や充実感、自己有用感を高め、視野を広げ、志高く、すばらしい未来を創り出す力をはぐくんでいくと考えます。

令和の新しい時代の中で、私たちは、子どもたちの造形活動をとおした豊かな成長のために、どのような題材をどのように目の前にいる子どもたちに提供していくのか、本大会で一緒に考えていきましょう。

(研究局長・開催地区代表理事・前橋市立原小学校校長 間々田 博)



大会宣言

私たちはこれまでに、各都県の造形教育の充実・発展のために、相互に連携し合いながら、研究と実践を積み重ね、着実にその成果を共有・確認してきました。

昨今、我が国はグローバル化の進展や人工知能（AI）の飛躍的な進化によるSociety5.0時代の到来や少子高齢化など、急激な社会的変化の中で、先を見通すことが難しい時代となっています。

このような中で、我が国の伝統や文化・芸術に立脚した広い視野を持ち、志高く未来を創り出していくために必要な資質・能力を子ども達一人一人に育ていく重要性が強く求められています。まさに、造形教育そのものの目指す姿だと置き換えたとしても、過言ではありません。

一方、教育改革は未来を見据えて急速に進み、新しい時代の要請に応える学校教育の在り方と方策が示された新学習指導要領が告示されました。幼稚園では、既に全面実施がなされ、小中学校高等学校では、移行期間の中で一部先行実施も含め、目の前に迫った全面実施に向けた取組が着実に進行しているところです。

さらに、働き方改革も迫られる厳しい職場環境において、豊かな造形教育を推進していくことの重要性も改めて再考しなければならないのは、まさに今であり、急務であると考えられます。

本大会では、幼稚園、小学校、中学校、高等学校が、「出会い」「かかわり」「つながる」ことを視点に、造形活動を推進していくことで、幼児、児童、生徒達が、達成感や充実感、自己有用感を高めるとともに、視野を広げ、志高く、素晴らしい未来を創り出す力を育ていくものと考えます。

さらには、造形教育における主体的・対話的で深い学びの実現に向けた研究実践が各都県より提案され、活発な研究協議がなされるとともに、造形活動における「深い学び」の姿が具現化されることを期待しています。

以上のことから、群馬大会は、次に掲げる事項について推進することを宣言します。

- 令和の元号のもと、新たな時代における造形教育を一層充実します。
- これまでの造形教育の成果と課題を共有し、造形教育における主体的・対話的で深い学びを具現化します。
- 豊かな感性を育む造形教育に必要な指導時数の十分な確保とともに、柔軟な指導体制や指導方法の工夫改善を進めます。
- 教科担当制拡大を見据え、美術免許教員の採用・増員の必要性を要望します。
- 幼児教育における造形教育の一層の充実を進めます。
- 高校教育における造形教育の一層の充実を進めます。

令和元年11月14日

第59回 関東甲信越静地区造形教育研究大会群馬大会

第56回 群馬県造形美術教育研究大会前橋大会



(編集局長・群造美副会長・伊勢崎市立坂東小学校校長 内藤 武志)

「図画工作科・美術科における主体的・対話的で 深い学びの視点に立った授業改善」

文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官
文化庁参事官（芸術文化担当）付強化調査官
国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部教育課程調査官

岡田 京子 氏



1 新学習指導要領の改訂の視点

- よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという目標を学校と社会とが共有し、連携・協働しながら、新しい時代に求められる資質・能力を育む「社会に開かれた教育課程」の実現を目指している。さらに「育成を目指す資質能力」「カリキュラム・マネジメント」「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善等がキーワードとして示されている。

2 「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の視点

- 学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連づけながら、見通しをもって粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる「主体的な学び」が実現できているかという視点で授業改善を行う。
- 子供同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考えを手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める「対話的な学び」が実現できているかという視点で授業改善を行う。
- 習得・活用・探求という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだしたり、解決策を考えたり、思いや考えを基に創造することに向かう「深い学び」が実現できているかという視点で授業改善を行う。

3 具体的な授業改善の視点

- 題材、材料、時間配分、発問の工夫による授業改善をもとに、次のクラスで、来年度、今度この題材をするときには、という授業改善はこれまでもされているが、本来、授業改善は授業後にやるのではなく、その時にできることをその場で改善をしていくことが大切である。
- まず、資質・能力とは何なのかを確認することが大切である。小学校1年生の前提として幼児期の活動をふまえ、人は感じ方・考え方・表し方が違うんだということをやっている。そのことを共有することから小学校図工科の指導が始まる。
- 造形的な見方・考え方、そして生活や社会の中の形や色などと豊かに関わる資質・能力の育成を新学習指導要領では大きな3つの柱として整理されている。これらに関連付けて指導することが大切である。
- 図工科で目指す資質・能力とは、だれもが必要な資質・能力が示されている。つまり形や色の視

点をもつことの大切さ等である。

- 教師の創意工夫を生かした題材設定や、個々の作品や活動を創り出すことが大切である。
- 「見通し」「振り返り」の重要性があげられるが「振り返り」のさせ方が課題である。
- 友達の作品をみて感じ取ること・考えさせることが大切である。
- 造形的な見方・考え方が働いていたかという視点を大切にすること。
- 造形的な見方・考え方を働かせていくと、資質・能力が育成されていくという支え合う関係であると捉え、育まれる資質・能力について評価していく。

4 三観点による評価についての考え方

- 授業改善の基本方針として、児童の学習改善につながるものにする。
- 先生の指導の改善につながるものとする。
- 必要性・妥当性がないものは、見直していくこと。
- 毎時間の評価を記録する必要性はないが、指導改善のための評価はすること。

記念講演会 II

「図画工作科・美術科における主体的・対話的で深い学びの視点に立った授業改善」

文部科学省初等中等教育局視学官
(兼任)文化庁参事官(芸術文化担当)付教科調査官
文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官
国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部教育課程調査官

東良 雅人 氏

1 「主体的対話的で深い学び」という視点に立つ

- 「出会い」「かかわり」「つながり」造形活動を通して、主体的対話的学び、学びを信じ実現していくこと。子どもたちにどういう力を付けたいのかということを考えて、主体的対話的で深い学びという視点に立つ事が大事である。
- どういった作品を作らせるのか、その視点に立つことが大事であり、今やっている授業が悪いことをやっている、ということではなく、自分の授業のどこが悪かったのか弱点を見つけ、視点に立って振り返ることが必要である。
- 身に付くとは、しばらくやっていなくても必要があればまた力として発揮できるのではないかというもの。学習のねらいがちゃんと設定されていて子どもと共有しているか、その活動を通して子どもが何を学んでいるのかを考えたい。
- 例えばある題材をスタートさせる段階で、子どもが「今回の授業で学ぶ事って何なのですか？」



と聞いたとき、導入で「これからこういうことをやるよ。」と言っても誰も知らないうちに学習が進んでいって、誰もねらいも目的も知らない。でも作品は出来るからそれでよしとなっている。そういう授業では主体的な学びはうまくいかない。

- どれだけ頑張ってもみんな同じものになってしまう。結局は先生の用意した答えに子どもを向かわせているだけの授業になっていないか。
- 学習のねらいを子どもと共有して、学習のねらいに向き合いながら、子どもが考えていく。そこを子どもたちは知識や技能を活用して課題を乗り越える。先生が用意した答えに向かうというよりは、子どもたちが色々考えてそれぞれの答えに向かうようにする。
- 一つの答えになる必要はない。ねらいは一つでも答えは、先生の用意している答えに向かうのではなく、子どもたちの導き出した答えに向かわせることが大切なのだ。
- 答えのない問いに毎日向かわせている。どういう道筋で子どもたちが答えを導き出したのかをほめてやる。それが次の学習にもつながっていくのである。

2 教育課程の中の美術

- 一番自分が苦勞したこと、それを先生がほめてあげる。教科の中でしか教科を考えない、そういったことは少なくない。狭い世の中で教科のことを考えるのではなく、やはりもっと大きな視点に立って学校教育課程の中で、その教科ならではのこともある。
- 色々な教科がある中で美術がある。学校というものは教育課程の中で、例えば大きな森の中に教科があり、もっと大きな視点の中で教科がある、どういうふうに子どもたちの学びを考える。
- 子どもたちが主体的に学ぶ視点に大きな役割となる、社会に開かれた教育課程の実現には、三つの視点があり、一つは教育課程の目標を明確にすること。みんなで共有してうちの学校ではどんな子どもを育てていこうかを考える。二つ目は、教科としての資質能力は何かを明確にすること。三つ目は学校だけではなく社会と連携しながら子ども達を支え、育てていこうということ。それは大きな視点で考えていかなければ難しいことで、明日の授業や協議も大きな視点で考えていってほしい。
- 必修科目はすべての子どもたちに必要な資質能力を身につけさせるものであり、人格の完成を目指している。表現しなくても鑑賞で美術に関わることにより、すべての子どもたちに、人格の形成ということを目的に指導する。美術の目標、立ち位置をしっかりと確認する。
- 子どもが将来プランニングをする、表現しなくても作品を豊かに感じ取ったり鑑賞したりする。例えばコーヒーカップを選ぶとき、カーテンを変えるときに、ちょっと温かい感じの部屋が良いなら赤色にしたらどうか。神社や仏閣など先人の知恵にふれて、伝統的なものを守っていこうという気持ち。三つの柱を通して、そういう力を付けていくということを考えてほしい。
- 基本的な美術とは何かを考えていかなければならない。小中高校の発達段階という連続性の中で教育課程を考えていくことが大切。当然目の前の子ども達を大事にし、大きな広い視点を持って子どもたちの主体的な学びを考えていく。それを三つの柱で整理したが、三つの柱が羅列されているだけでなく、総合的に学ばせていく。
- 図工や美術の一番素晴らしいことは、子どもが一番学べる方法を先生が考えられること。子どもたちを一番よく知っている教師が、子どもたちが一番学べる方法を考える。子どもたちの実態、一番子どもたちのことをよく知っているのだから、何から学ばせていくのかを考える。自信と誇りを持って指導していただきたい。
- 鑑賞の授業の視点の中で、技法に目がいきがちだったのが、主題に目がいくようになっていく。今回の学習指導要領では様々な表現と鑑賞とあるが、表現というのは子どもたちが自分の引き出

しの中を豊かにしていく，その一つの方策が鑑賞。もちろん鑑賞の学習の引き出しだけで出来るものではない。色々な経験が子どもの中にある色や形として出て行く。なかなか経済的に厳しい子には引き出しを豊かにすることが難しく，だから美術の授業で引き出しを豊かにしてあげる。その方策の一つが鑑賞である。

- 表現することと，鑑賞することが関連し合うような学習活動にしていく。鑑賞で学んだことが表現に生かされていく，また表現で学んだことが鑑賞にいかされていく。そのような学習活動を展開していきたい。
- 言語活動，形や色を関連づけながら図工美術ならではの言語活動を考えていくのが自己との対話である。
- すぐ班，すぐグループとなっていないか？自分の考えを持っていなければ言えない。自己との対話が大切でありこれが深い学びとの実現につながる。

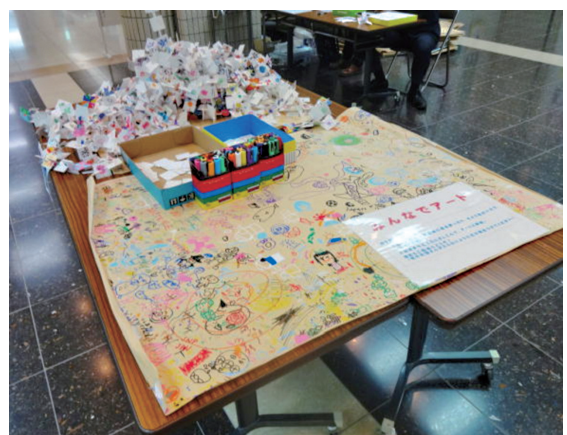
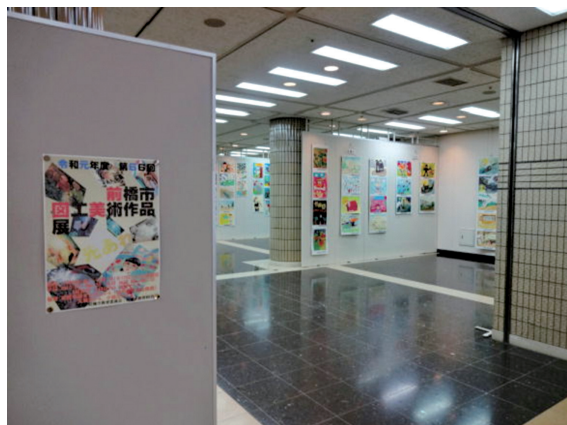
3 教科の本質に迫った授業

- もう一つ鍛えられていくのが，教科の本質にあった対象や事象を，造形的な見方考え方という呼び名にしてこれが働くような授業を目指すことで，感性や創造を働かせることである。
- ただ単に美術に関するものを扱っているだけで満足していないか？A表現とB鑑賞の活動が題材の中で展開しているが，発想や資質，見方や感じ方を深めてほしい。（造形的な見方や考え方）作ることだけが目的になってしまった授業では教科の本質的なものが働きにくい。上手に作品を作ることだけになったときには教科の本質にはならない。
- 教科の本質に迫った授業になっているのか，本当の授業のための授業になっているのか見直し，本質に迫っていることが大切。
- 木を見る視点と森を見る視点。造形のはらたき，視点を育てることにより普段気づけなかったことに気づけるようにしていこうというのが美術の本質である。例えば高崎駅の階段アート，高崎駅にある自動販売機，前橋市のバラのマンホールのふたなど，何も考えなければ気づかない物でも，視点が豊になるから気づく。こういった視点を豊かにしていくために，中学校の共通事項により，理解させていってほしい。
- 知識をどれだけ積み重ねるか，これからは暗記させるのではなく，知識を活用して造形的な視点をはっきりさせていくことによって子どもたちを育てていこうといきながら授業作りを進めていくことが求められる。
- 教育課程という大きな森を見ることによって，社会という森の中に学校があり，その学校の中に教育課程があり，教育課程の中に美術や工芸がある。その中で鑑賞をしている。すべての子どもたちは豊かな存在であり，その豊かさを美術や工芸で広げたり深めたりする。自分の世界観が持てる授業が美術である。
- 世界観を持てる授業，子どもの力で学べることは先生が少し我慢して子どもたちに学ばせる。主体的対話的で深い学びにつながるような，子どもたちの深い学びの実現をしてほしい。





前橋市図工美術作品展の様子



全体会場・受付等の様子



レセプション（前橋テルサ 18:00～）



大会 2 日目・授業公開・分科会

公開保育・公開授業一覧

校種	会場	学年	活動内容・題材名	授業者	指導助言者	司会者
幼稚園	前橋市立 おおご幼稚園	年少	思い思いの遊びの中での 表現 “ものを使って”	岩崎 紗也 坂部みゆき 奏 直子 萩原 亮 岩上 晴美 長野 麻衣	群馬大学教育学部教授 林 耕史	東吾妻町立あづまこども園 阿部 奈美
		年中				
		年長				
小学校	前橋市立 原小学校	2年	A表現 工作で表す わっかでへんしん	佐藤 理絵	群馬県教育委員会指導主事 前島 隆宏	前橋市図工美術 主任会
		3年	A表現 立体で表す きらきらファンタジーラ ンド	堀込 恵	群馬県総合教育センター指導主事 足達 哲也	前橋市図工美術 主任会
		6年	A表現 造形遊び ひらいてみると	佐藤 雛	前橋市教育委員会指導主事 森坂実紀人	前橋市図工美術 主任会
中学校	前橋市立 第六中学校	3年	A表現 映像表現 6Tube ～私の主張を動画で発信～	鈴木 紗代	群馬大学教育学部教授 茂木 一司	前橋市図工美術 主任会
	前橋市立 荒砥中学校	1年	B鑑賞 鑑賞入門「花子誕生」	山岸 千冬	群馬大学教育学部准教授 市川 寛也	前橋市図工美術 主任会
高等学校	群馬県立 前橋東高等学校	1年	表現 デザイン ご当地ナンバーのデザイン	佐藤 卓	群馬県教育委員会指導主事 島田 聡	群馬県立大間々高等学校 渡邊 俊介

前橋市立おおご幼稚園 公開保育 年少・年中・年長

思い思いの遊びの中での表現 “ものを使って”

■保育者 岩崎紗也・坂部みゆき・奏 直子・萩原 亮・岩上晴美・長野麻衣

※幼稚園の公開保育の詳細については、分科会の内容と重なりますので、分科会のページ「分科会 1（表現）— a 群馬県 幼稚園」をご参照ください。本ページでは、写真で当日の保育や分科会の様子をお伝えします。



わっかでへんしん

■授業者 佐藤 理絵

題材について

原小学校では、材料とかかわる場や友達とかかわる場を「学習環境の設定」としている。

材料とかかわる場とは、児童が夢や願いなどの表したいイメージをもち、材料に直接触れてイメージを広げたり、イメージに合う材料を選んだりして進んで材料とかかわれる場の設定である。友達とかかわる場とは、友達と作品を見せ合ったり一緒に作ったりすることで、お互いを認めたり高めあったりする場や自分のイメージを友達に伝えたり友達と一緒に広げたりする交流を通して、つくりだす喜びを味わえる場の設定である。

本クラスの児童はアンケートで、全員「図工が好き」と答えているが、作品をつくりたいという意欲があるものの、つくりたいものを考えるのに少し時間がかかったり、なかなか思い浮かばない、つくりたいものがあってもどのように表せば良いかわからない、などの思いをもっている実態が明らかになった。また、ホチキスの使い方の指導の必要性もわかった。

このような実態から、本題材では、「わっか」を身に付けることで何かに変身できるイメージを膨らませることからスタートしていく。材料とのかかわりでは、イメージしたものに合う形や色を考え、身近にある材料を選択し、自分を変身させていく。変身の過程を鏡などに写し確認することで、さらに発想を広げ楽しみながら制作をしていく意欲につなげていく。また、自分を変身させることは、自分も作品の一部となり自己肯定感が高まる、などを狙いとして設定している。

友達とのかかわりでは、友達と見せ合ったり話し合ったりしながら、イメージを広げられるように学習過程や教室環境の設定を工夫している。題材の最後には、「へんしんショー」で変身した姿を見せ合い、お互いの工夫や面白いところを話し合う鑑賞の時間も設定している。

《全6時間の過程》

- 1 ホチキスの使い方を確認してわっかをつくる。(であう)
- 2 前時でつくったわっかやいろいろな大きさのわっかを身に付けたり飾ったりして、どんなものに変身したいかを見つける。(試行の時間 本時)
- 3・4 変身したいものに近づけるように材料を選んで、わっかに飾りを付ける。鏡で確認したり友達と見せ合ったりして、試しながら変身するものをつくる。(ひろげる)
- 5 つくった変身グッズをさらに工夫して飾りを足す。
- 6 「へんしんショー」でお互いの変身を見合う。面白さや楽しさを伝え合う。(ふりかえる)

本時の授業の様子

本時のねらいは、「わっかを身に付けたり飾りを付けたりすることを通して、自分を変身したいものを見つけようとする」である。自分を変身したいものをどのような形や色で表すかイメージを膨らませ自己実現していくための導入部分の授業であり、次時に向けての「試行の時間」として設定している。

《学習活動》

- 1 めあての確認・「へんしんクイズ」(7分)

教師が何も付いていないわっかを身に付け変身する。わっかの上下左右に何かがあることを想像させるため、身振り手振りで何に変身しているか想像をさせる。頭上、顔、首、腰、足などに大きさの異なるわっかを付けることで表現の範囲を広げたり、飾りの付いたわっかを身に付けることで、「動物園」、「サンタクロース」、「いくら巻」きなどいろいろなものに変身できることを見せイメージをもちやすくする。

2 「へんしんタイム」(3分)

児童は、頭に何も付けていないわっかをかぶり、自分が何に変身しているか想像する。鏡やモニターにポーズをとった自分の姿を写しイメージしたり確認してみる。その後、グループ内で変身したものを発表しあい発想を広げる。

3 「イメージを膨らませる」(8分)

大小様々な何も付いていないわっかを身に付け変身する。支援として変身できた児童をリアルタイムで紹介したり記録した姿をモニターで紹介し、可能性の広がりや発想の深まりにつなげる。

4 「おためしタイム わっかの飾り付け」(19分)

材料テーブル、わっか作りコーナーの提示と使い方の説明をし、安全確認も行う。各自が材料を選び色を考えながらわっかに飾りを付けていく。試行錯誤をしたり友達と会話をしたり、友達の様子を参考にしながらイメージを膨らませ制作していく。

5 片付け・振り返り・次時の連絡(10分)

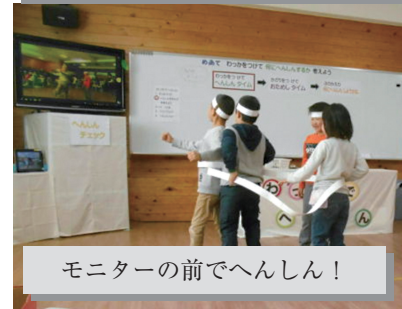
つくったわっかを片付け、ワークシートに「何に変身したいか」を記入。可能なら絵も加え、体のどこにどんなわっかを身に付けるのかを記入する。何に変身するか決まっていない児童は、どこにどんな飾りを付けたいかを可能な範囲で絵に表す。

「お家にあるお宝」で飾りとして付けたいものを次回持ってくることを伝える。

《環境整備の工夫》



先生は 何になったでしょうか？



モニターの前でへんしん！

きらきらファンタジーランド

■授業者 堀込 恵

題材について

本題材は、ペットボトルや卵パックなどの透明で光を通す身近な材料を使用する造形活動である。材料の組み合わせ方や光の当て方を考え、自分の思いが詰まった立体に表現する。

育成する資質・能力は、【知識及び技能】 共通事項(1)ア, A表現(2)イ【思考力, 判断力, 表現力等】 A表現(1)イ, B鑑賞(1)ア, 共通事項(1)イ【学びに向かう力・人間性】 学年目標(3)である。

材料を組み合わせたことで生まれる形や色に、光を当てた時と当てない時との違いに気付いたり、素材の透過性からイメージした世界を想像したりする力を育むことができる。前年時には「ひかりのプレゼント」で色水を用いて、色に着目した題材を扱った。

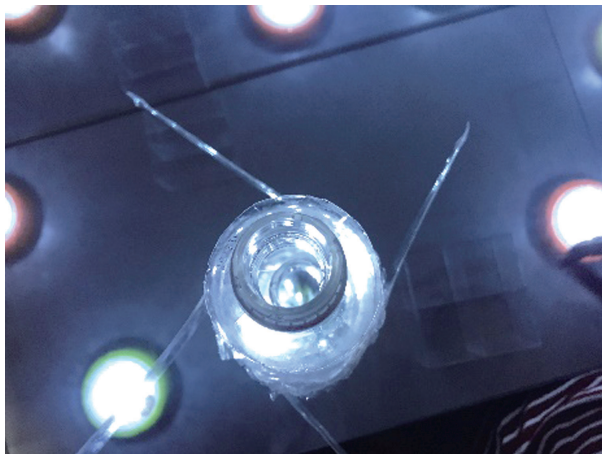
本時の授業の様子

めあてを知る段階では、児童が教室前方に集まって前時の振り返りと一緒に、使用する道具の使い方や試す方法を確認した。例えば、ペットボトルばさみを用いることで、ペットボトルの形状を螺旋状や放射状などに変形させることができる。組み合わせる際には、セロハンテープやグルーガンを用いることで、素材の透過性を維持しながら接着することができ、光源には百円ショップで手軽に入手できるライトを一人一つ用意することで、発想をすぐに試すこともできる。また、授業者は「きらきら感」「デコボコ感」「組み立て感」という三つの視点から材料選びをするように促していた。



教室内は、材料コーナーが教室中央にあったことや、暗箱ではなくカーテンで仕切った暗室を設けて試しの場が広がっていたことにより、友達の作品を見合える環境が整っていた。入念な場づくりが、児童の自分の思いと材料と光の関係を比較し、効果を確かめながら制作を進めることに繋がっていた。そこには、表現と鑑賞の行き来をしながら技能を働かせる児童の姿があった。

また、授業者の「試しの場へ行ってみたら」「どうだった」などの間接的指導で児童の課題を示したことが、各々の児童の表現したい思いを引き出していた。さらに工夫できそうな点を「パワーアップ」、暗転させて本時の振り返りをする場面を「スペシャルタイム」としたりするなど、児童に寄り添った言葉遣いに授業者の思いが表れていた授業であった。



ひらいてみると

■授業者 佐藤 雛

題材について

本題材は、学習指導要領のA表現：(1)ア、(2)アなどの「造形遊び」に基づき、空間を感じて傘で造形しながら場所を変化させる面白さを味わわせることをねらいとしている。そのために、児童が選んだり活動したりする過程で、材料や場所、友だちとつながることができる学習環境の設定を考えた。さらに、作品づくりの途中でも作品を見合い、感じたことを交流できるような、友だちとつながる学習環境の設定の工夫をした。これは、研究主題「イメージを膨らませ、造形活動を楽しむ児童の育成」、副主題「材料に主体的にかかわり、友達とつながる学習環境の設定を通して」に関連した工夫である。

傘には石突きやつゆ先があること、また、持ち手の形状から引っ掛けやすいなどの様々な特徴があるが、弧を描いた形のため単体では不安定である。また、材料として一つ一つが大きいことから一人で傘を組み合わせるのは難しいため、友だちと協力しながら活動する機会をつくることができる。そして、傘の内側にある骨は、スズランテープや針金などの様々な材料と組み合わせて工夫することもできる。児童は、材料となる傘を思いのままに組み合わせていくことで、色や形の重なりに関心をもったり、つなぎ方を工夫したりしながら表現していく。そして、そこから抱いたイメージをもとに、他の材料や道具と組み合わせ、装飾していく中で友だちと協力しながら作品を完成させていくものと考えた。

本時の授業の様子

本時は、「傘や場所の特徴から思いついたイメージを友達と共有し合い、試したり、表し方を工夫したりすることを通して、空間に働きかけることができる」をねらいとしている。めあては「傘の特徴を生かして体育館をかざろう」とした。評価項目は、「開いた傘の色や形の特徴などから自分のイメージを持ち、空間に傘で表したいことを思いついたり、周囲の様子を考え合わせたりしながら活動できている」思考・判断、「開いた傘の組み合わせ方や並べ方などを試して、空間での表し方を工夫してつくっている」創造的な技能である。

導入では、前時の様子を開いた傘を使って、どんなことができそうか振り返った。傘の特徴として、開く、閉じる、カラフル、いろいろな大きさがある、持ち手があるなどが出された。また、傘で出来ることとして、引っかけられる、組み合わせられる、吊るせる等の「技」が出された。このことにより、子どもたちに前時の活動を振り返らせ、これからの活動に期待させることができていた。研究協議では、このときに体育館に入る「光」についても触れられると、共通事項である「光」を子どもたちが意識して活動できたのではないかとの意見があった。短時間で、この後のグループ活動の流れ、注意点、材料について、などの指示が端的にわかりやすく指示・説明が行えていた。

次に、展開の部分では、授業の視点であり、研究の手立てである、「友達とつながる場の工夫」及び、「材料とかかわる場の工夫」がされていた。十分に検討を重ねられた二つの工夫は、とても効果的で、活動の充実とねらいの達成に大きく影響したと考える。

具体的には「友達とつながる場」として、活動の始まる前にどんなものをつくるのか確認する

場、話し合いをしながら活動する場、活動の後に他のグループの作品を見て感じたことを伝え合う場を設定していた。確認する場では、言葉のやり取りで友達とイメージの共有をしていた。活動の場では、色や形のバランスを見ながら、置き方を変えたり材料を変えたりするなど、それぞれの子どもが「いいな」と思うことをやりながら、「これがいいんじゃない」「わあすてきになったね。」など活発なやりとりをしていた。伝え合う場では、他の班の真似したいことや工夫を見付けることができている。他の班の工夫を生かしつつ、自分たちの考えを加えながら活動ができていた。どの場においても、子どもたちはよく話し合い、協力しながら空間の雰囲気を変えようとしていた様子がみられた。これは、これまでの授業での積み重ねと、ワークシートをはじめ、教材の様々な工夫により、各個人が表したいものへの意識が高まっているからこそその成果と言える。



次に「材料とかがわる場の工夫」であるが、本時では「材料とかがわる場」として、体育館の中央に傘やひもなどの材料や、ハサミやペンチなどの用具を置く場を設定していた。「どんな材料があれば、子どもたちはのびのび製作できるだろう」と教師が子どもの気持ちになって用意した材料がそこにあり、子どもたちは必要な材料や用具を一生懸命考えながら、選んで使うことができている。また、場を中央に配置したことで、材料や用具を取りに行く際に、他の班はどのよう



に空間の雰囲気を変えようとしているのか自然に相互の鑑賞が行われ、視野が広がり、自分たちの班の発想のヒントにすることが出来ていた。授業者に聞いたところ、材料の種類と、道具の置き場に関しては試行錯誤を繰り返したようで、その努力が実っていた。

例えば、ある班では、バスケットゴールに傘をぶら下げつつ、スズランテープで装飾を加えたり、同じバスケットゴールからぶら下げた班も、傘の色を変化させて大きく印象の違う構成をしたりと、傘の特徴を生かして自分たちのイメージを具体化していた。このように、各班の工夫が他の班にも広がり、それぞれの工夫をクラス全体で共有できていた。

以上のように「材料とかがわる場の工夫」「友達とつながる場の工夫」を手立てとした学習環境の設定をしたことで、材料と主体的に関わり、友達との対話を通して深い学びを具現化していた授業になっていた。

最後に、お互いの班の作品を見合ったり、自分の班の作品をタブレットで撮影したりしながら、まとめを行った。それぞれの班が工夫してできていたので、「わあ、すごーい。」などあちこちで賞賛の声が上がり、とてもよい雰囲気で授業を終えることができていた。



6 Tube

■授業者 鈴木 紗代

題材について

この題材は、生徒が問題や疑問に思っていることや社会や学校に対して伝えたいことなどを映像で表現するものである。映像は、インターネットやスマホの普及により、生徒たちにとって身近で常に目にしている表現であると同時に、やり直しが容易であること、技能差が目立ちにくいという特性がある。そのため、抵抗感が少なく活動に取り組み、自身が見てきた映像表現や撮影経験を生かすことができる。光や音、動きといった映像表現ならではの表現に着目し、光の具合や動きに合わせたカメラの配置、音の入れ方などの違いを体験する中で、自分たちの表現方法を明確にしながら映像表現が工夫できる。そうしていくことで、表現することの喜びを味わうとともに前向きな取り組みが期待できる題材である。

また、映像表現は、カメラ役や役者など複数の役割が必ず存在することから必然的に協同的な取り組みとなる。仲間と協力して考え、「撮る・見る・考える」の活動を仲間と繰り返すことで、より工夫して表現活動に取り組み、思い通りに表現しようとする充実感や楽しさを実感することができる。

本題材では、生徒たちが映像を「見る立場」と「作る立場」の双方を経験していく。このことで生徒たちは「自分の考え（表現）を伝える（発信する）力」「相手の考え（表現）を読み取る力を育み、その力を、社会とつなげることができる題材である。

本時の授業の様子

本時は、班のテーマによる映像作成（条件：無編集・30秒以上・生徒が一人以上出演）した後の中間検討会となる。本時の後、3時間で作品を完成させる予定である。

本時のめあて：班同士で検討会をし、映像をよりよくしよう。

教師から本時の検討会の手順について簡潔に説明する。

- ① 2班同士になり、お互いの班の作品を鑑賞する
- ② 班の監督より映像のコンセプトについて説明
- ③ 各自で3色の付箋に意見を書く（赤：よいところ 青：疑問 黄：改善点）
- ④ 意見交換

生徒は、お互いの班の作品を鑑賞した後、付箋に意見を書き始める。良いところを中心とした意見を書く生徒が多い中、なかなか手が動かない生徒もいるのを教師が見取り、再び説明を加える。「たくさん、3枚以上は書こう。」「全肯定や全批判でなく、冷静に批評をすることが大切だよ。」生徒は、良いところを書く付箋だけでなく、疑問に思ったことや新たな提案を書く付箋もたくさん書こうと努力していた。教師が班を周り、「コンセプトが伝わりにくそうだね。」「これは

カメラワークのことだね。」と映像をよりよくする視点を明確にしながら適切に助言していた。

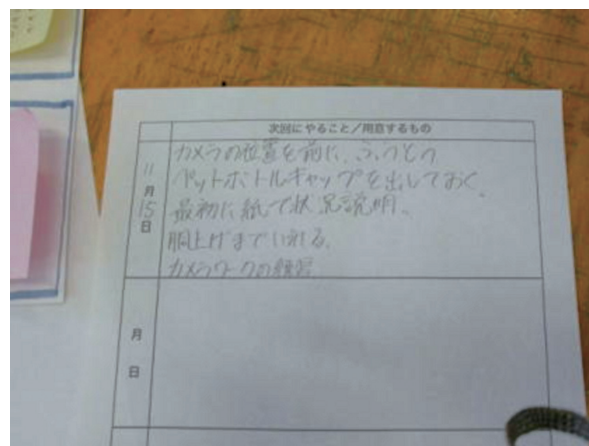
その後、意見が書かれた付箋を班で意見交換しながら映像をよりよくする視点（カメラワークや音，コンセプトなど）ごとにまとめ，班で改善点を考えた。友達の意見は大変気になる様子で，書いてもらった付箋を渡されるとすぐに食い入るように確認していた班もあった。付箋を書くことに時間を多く割いたため，話し合いは短い時間になったが多くの意見を出し合っていた。



教師は「それ，いいね。」「こうすると，もっとおもしろいのでは。」などと生徒の意見を大切に，同意したり励ましたりしていた。

振り返り：班でまとめたものの中から次時で行う改善点を書く。

授業の最後の段階では，班でテーマごとにまとめたものの中から，次の時間に実際に行う改善点を話し合った。各班では活発に意見が出され，「コンセプトを一番先に台詞で言ってみようよ。」「カメラの位置を高くしてみよう。」など具体的な考えを出し合っていた。



コンセプトをより明確にし，相手に伝わっているかを確認するためにもお互いに鑑賞し合ったことは有効であった。導入で，短い自己紹介映像を撮っていたこともあり，生徒は映像表現に対して慣れている様子で大変意欲的であった。終始和やかに話し合いが行われ，教師の説明やアドバイスなどに素直に耳を傾けていた。また，映像をよりよくするために改善するところはないか一生懸命付箋に書こうとしていた姿が印象的だった。

鑑賞入門 「花子誕生」

■授業者 山岸 千冬

題材について

本題材は、形や色彩、作者の表現の意図や工夫などの造形的な要素に、子供たちが自ら気付ける作品である。その気付きをつなげたり広げたりすることで、作品を味わう楽しさに自然と誘う力が「花子誕生」にはある。また、この作品にはあたたかさがあふれ、未来に向かっていく不安や希望も感じられる。中学校生活が始まったばかりの子供たちに、出会わせたい作品である。授業者は群馬の出身ではないが、山口薫「花子誕生」が国立の美術館ではなく、群馬の美術館に所蔵されていることに驚きを覚えた。若い頃は、作品の感動を伝える形で鑑賞授業を行っていたが、年を重ねていくうちに、鑑賞の題材として力がある作品だと見つめ直し、鑑賞での構成を考えた。

本時の授業の様子

山口薫「花子誕生」を鑑賞する活動を通して、お互いの見方や感じ方を伝え合い、また、形や色の視点を押さえて考えることで、自分の見方や感じ方を広げる様子が見られる授業を目指した。今回、生徒の見方や感じ方をより広げる手立てとして、個人からグループ、クラス全体へと学び合う場を設定し、学習形態を工夫した。

【個人】 A3サイズの作品を全体で鑑賞し、何が描かれているのか考え、全員で共有した。その後、ハガキサイズのカラー図版を一人一人に配布し、じっくり鑑賞を行った。作品を近くから見たり、遠くから見たりして作品に真剣に向き合っていた。付箋には、作品を見て気付いたことを書き、色、形、時間など様々な視点から作品を鑑賞することができていた。

【グループ】 グループでは、A4サイズの図版を使い鑑賞した。発表しやすいようにT字型のグループにして意見交流し、同じ考えをまとめた。同じ考えをまとめることで、お互いの考えに耳を傾け共感し、考えが深めることができていた。その後、グループでまとめた考えを全体の前で共有し、形、色彩、イメージごとに分けて板書することで、全体の意見や考えをまとめて整理した。

【全体】 実物大の30号の作品を掲示し、生徒を黒板の前に座らせ、実物大の作品をじっくり味わわせた。美術館で作品を見ているような状況で、生徒一人一人がもう一度作品に向き合い新たな気持ちで鑑賞することができた。授業の始まりを振り返り、学習後と比較して感想を書くことで、自分の感じ方の変化や深まりを実感できていた。

今回授業形態を工夫し、自分の考えだけでなく他者の考えも共有し、また全体で考えをまとめることで、自分の見方や感じ方を広げることができていた。



個人



グループ



全体

群馬県立前橋東高等学校 公開授業 1年

ご当地ナンバーのデザイン

■授業者 佐藤 卓

※高等学校の公開授業の詳細については、分科会の内容と重なりますので、分科会のページ「分科会7（表現）— a 群馬県 高等学校」をご参照ください。本ページでは、写真で当日の授業の様子をお伝えします。



校園種別分科会

大会テーマ	会場	分科会	分科会内容	提案・助言・司会・記録担当(地区)	校園種	
出会う かかわり つながる造形	活動を楽しみ みんなと つながる造形	前橋市立 おおご幼稚園	1	表現	1a 群馬県	幼稚園
	材料と かかわり 友達と つながる造形	前橋市立原小学校	2	A表現 造形遊び	2a 東京都	小学校
					2b 栃木県	
					2c 群馬県	
			3	A表現 絵・立体・工作	3a 山梨県	小学校
	3b 新潟県					
	3c 静岡県					
	3d 群馬県					
	4	B鑑賞	4a 長野県	小学校		
			4b 埼玉県			
4c 群馬県						
素材と かかわり 社会と つながる造形	前橋市立第六中学校	5	A表現	5a 茨城県	中学校	
				5b 東京都		
				5c 群馬県		
6	前橋市立荒砥中学校	6	B鑑賞	6a 千葉県	中学校	
				6b 神奈川県		
				6c 群馬県		
社会と かかわり 明日につながる 造形	群馬県立 前橋東高等学校	7	表現	7a 群馬県	高等学校	

提案者	助言者	司会者	記録者	世話係
萩原 亮 他 前橋市立おおご幼稚園	林 耕史 群馬大学教育学部教授	阿部 奈美 東吾妻町立あづまこども園	黒岩かおり 東吾妻町立いわしまこども園	村田いづみ 東吾妻町立さかうえこども園
上野果菜子 世田谷区立代沢小学校	田中 明美 品川区立立会小学校主幹教諭	鈴木 広隆 目黒区立宮前小学校	小林 麻里 目黒区立駒場小学校	砂田 尚美 高崎市立鼻高小学校
笹竹 大樹 宇都宮大学教育学部附属小学校	谷仲 俊彦 栃木県総合教育センター指導主事	河上有美子 宇都宮市立西原小学校	橋本 恵一 茂木町立須藤小学校	
田村 麻子 高崎市立中央小学校	前島 隆宏 群馬県教委義務教育課指導主事	黒澤 馨 高崎市立京ヶ島小学校	新井 友康 高崎市立下室田小学校	
井澤映里子 甲府市立山城小学校	小田切 武 甲州市立神金小学校教頭	鷹野 晃 北杜市立明野中学校	五味 一也 笛吹市立御坂中学校	内藤 武志 伊勢崎市立坂東小学校
椎野 越子 新潟市立白根小学校	永井 高志 新潟市立早通小学校校長	齋藤 暢 新潟市立横越小学校	小日向真理子 新潟市立亀田西小学校	
長阪 浩倫 藤枝市立青島小学校	道越 洋美 藤枝市立大洲中学校教頭	寺田 明子 藤枝市立高洲小学校	宮城嶋理重 静岡市立清水三保第一小学校	
佐藤 潤子 伊勢崎市立殖蓮小学校	足達 哲也 群馬県総合教育センター指導主事	狩野 洋平 渋川市立橘北小学校	稲木 千坂 渋川市立古巻小学校	樺澤 聡 館林市立美園小学校
常田 浩二 信濃町立信濃小中学校	徳嵩 博樹 長野市立城東小学校教頭	長崎 至宏 長野市立古里小学校	北澤 公浩 長野市立南部小学校	
古屋美恵子 深谷市立花園小学校	大谷 裕紀 熊谷市立玉井小学校校長	根岸 由紀 深谷市立岡部中学校	井上 暢之 深谷市立深谷中学校	
森 恵那 館林市立第七小学校	森坂実紀人 前橋市教育委員会指導主事	金子 桂子 板倉町立西小学校	田中 良子 太田市立葎川西小学校	瀧間 京子 沼田市立多那中学校
細谷 剛 水戸市立国田義務教育学校	角谷 直人 水戸市立双葉台小学校校長	村井 悟 水戸市立常澄中学校	堀江 昌代 水戸市立双葉台小学校	
平岡 紀子 江戸川区立鹿骨中学校	大瀬 義一 調布市立第三中学校校長	橘川 小夜 小金井市立小金井第二中学校	濱 夏子 墨田区立錦糸中学校	
河合 恵 沼田市立沼田中学校	茂木 一司 群馬大学教育学部教授	飯塚 淑光 藤岡市立北中学校	山田 典子 東吾妻町立原町小学校	谷 滋 桐生市立新里東小学校
古川 明海 千葉市立土気南中学校	若海 唯賀 千葉市立弁天小学校校長	阿部 真紀 千葉市立緑町中学校	岩坪 朝子 千葉市立轟町中学校	
美濃谷 学 綾瀬市立城山中学校	天方 健 前福島大学発達人類学部教授	規工川奈実子 綾瀬市立北の台中学校	東原 加奈 大和市立南林間中学校	
國枝 里江 桐生市立中央中学校	市川 寛也 群馬大学教育学部准教授	茂木 克浩 みどり市立笠懸南中学校	小田島 彩 みどり市立大間々東中学校	高橋 浩昭 群馬県立前橋東高等学校
佐藤 卓 群馬県立前橋東高等学校	島田 聡 群馬県教育委員会指導主事	渡邊 俊介 群馬県立大間々高等学校	小池 雅之 群馬県立渋川青翠高等学校	

分科会1（表現）—a 群馬県 幼稚園

「感じたことや考えたことを“もの”にかかわって自分なりに表現しようとする幼児の育成」 ～写真から見る見取りの違いを保育に生かす～

- 提案者 萩原 亮（前橋市立おおご幼稚園）
- 助言者 林 耕史（群馬大学教育学部教授）
- 司会者 阿部 奈美（東吾妻町立あづまこども園）
- 記録者 黒岩かおり（東吾妻町立いわしまこども園）

1 提案者から

《主題設定の理由》

本大会のテーマである「活動を楽しみ みんなとつながる造形」を研修の方向性とし、「感じたことや考えたことを自分なりに表現しようとする姿」について研修を進めてきた。

学年ごとに、育ってほしい姿や目指す幼児の姿についてカンファレンスをし、いろいろな“もの”を使って造形表現を楽しめるようになるための環境構成のポイントを明らかにすることで、保育の改善に役立てることができた。

しかし、幼児が何に興味を持ち、どこに楽しさを感じていたかなど、幼児の思いや育ちについては十分に話し合うことが出来なかった。

そこで、教師が幼児の見方を広げたり、見取りの違いを掘り下げたりして幼児理解することは、幼児の思いや教師の願いに沿った環境構成につながり、幼児は感じたことや考えたことを自分なりの方法や仕方で、様々な“もの”と関わりながら、さらにのびのびと表現することを楽しむようになるのではないかと考えた。今年度は、ポートフォリオ（写真）を取り入れ、「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」を考える視点にして、研修を進めることにした。

《研究のねらい》

幼児のいろいろな見方に触れたり、視野を広げたりしながら見取りの違いを掘り下げていくことで教師の幼児を理解する力を高め、10の姿を意識した保育の充実を図りながら、幼児の感じたことや考えたことを自分なりに表現しようとする力を育てる。

《研究の方法》

- ①造形表現の共通理解を行う。
- ②ポートフォリオを取り入れてカンファレンスを行う。
- ③実践を振り返り、保育のどの場面に10の姿があるのかを探る。

2 参加者から

◎「“もの”にかかわって自分なりに表現する」というテーマで、自園でも3年間の子どもの成長



を考えた造形遊びを展開しているが、年齢に応じた“もの”とのかかわらせ方について、どのような工夫をしているか【質問】

3歳児……すぐ使える、扱いやすい、付け足して完成出来るように用意しておく。

自分のものにマークシールを貼れるように用意しておく。

4歳児……いろいろなものに興味をもって、やってみたいとかかわれるようにしている。くりかえし遊べる場を用意し、じっくりと十分にかかわれるようにしている。

5歳児……本物らしさや「こうしたい」という思いを大事にして制限を設けないようにしている。また、子どもの要求を引き出すよう、必要と思われる材料や教材をあえて出さないで不足感を持たせるような工夫をしている。

◎自園では、子どもの育ちや教師の意図などを研修している。ポートフォリオについてのポイントや、いつ、どんな場面を、誰が撮るかなどどうしているのか？【質問】

- 5
つ
の
ポ
イ
ン
ト
- ・より細かい表情や仕草が見えるようにする。
 - ・幼児に、写真を撮らせている感じを与えない。
 - ・撮影者は楽しく撮る。
 - ・人間関係が見えるようにする。
 - ・昨日・今日・明日のつながりを意識する。

◎自身が受け持つ3歳児は、製作の時に「先生、やって！」と言う子が多いが、自分で作るようになるまでの前段階を教えてほしい。【質問】

初めて使う材料もあるので、先ずはやり方を一緒に覚えていくことで、自分で作るようになってきた。

◎本日の保育の様子の中で、子どもたちが自由に廃材を使って製作し、テープの長さを調整したり失敗してやり直しをしたり、友達同士で話し合う姿が見られた。また、重いものを協力して片付ける場面も見られ、まさに日々の積み重ねだと感じた。【感想】

◎クラス内でよい活動があったときに写真を撮り、給食の時間にプリントして振り返りの時間に幼児の意見を引き出したり、明日の保育に生かしたりして活用している。また、『ももぐみ新聞』に吹き出しをつけて載せ、保護者に子どもたちの様子を知らせている。

3 助言者から

- ・園内研修の中で、「表現をどう捉えるか」「目指す幼児像」を共通理解することは、とても大切である。
- ・目指す幼児の姿をより具体的にする。例えば、“道具を使ってその楽しさを知る”だけでなく、「これこそ楽しんでいる姿」と具体的な指標となるようにするとよい。
- ・造形の捉えは絵を描くことだけではなく、日々の活動の中に造形の要素がある。たわんだ色紙を伸ばそうとしている姿が見られたが、どんな感触をもっていたのか……。水が入ったバケツの中に砂を入れて、料理の行程を再現し「こっちの砂がいい」と素材を見極めている……。これらの姿は造形表現における大事な姿と言える。
- ・作品だけで評価せず、“どんなことを感じ”“どう考え”“どうしてこの色を使い”“塗り直しをして……”という、プロセス評価+ウィル評価（「こうしよう」という意思を評価）をすることが大切である。

分科会2（A表現 造形あそび）— a 東京都 小学校

子供の夢中から生まれる

～今をつくりだす 図工の時間～

- 提案者 上野果菜子（世田谷区立代沢小学校）
- 助言者 田中 明美（品川区立立会小学校主幹教諭）
- 司会者 鈴木 広隆（目黒区立宮前小学校）
- 記録者 小林 麻里（目黒区立駒場小学校）

1 提案者から

研究主題のもと、5つの分科会を立ち上げそれぞれが主題に向かって研究をすすめた。子供の夢中とはなにか、夢中とはどのように生まれるのかを考えアプローチしていった。「おもいをひろげる」分科会では子供の夢中の姿として、2点考えた。1点目は、自分の思いで動いていく姿、もう1点は、行きつ戻りつしながら思考し試行していく姿と捉えた。その夢中の姿こそが「主体的な学び」となっているとした。



私たちの分科会では「つくってつくりかえてどんどん試していける活動」「教師の共感的なみとり」「友達と影響しあえる環境」の3本の柱をもとに、題材のねらいにそって授業の計画を立てた。

まず大事にしたことは、つくって、つくりかえて、どんどん試していけることができる活動を設定すること。子供の「もっとこうしたい」という欲求を追求し、活動途中での試行錯誤の連続の中、「自己決定」しながら乗り越えていくことで自分でできたことを実感し、そこに価値が生まれる。思いを表していくことが可能な活動で、加速度的に思いが広がり、体が動き、表現が深まっていく。失敗してしまうことが起きても、気軽にやり直しができることを教師がサポートしていくことが大切。

次に、教師は子供と同じ目線で活動に接する。子供を理解し、共感する。子供が何を感じ、何を考えているのか想像し、共感し、子供と同じ体験を教師もする。その共感が、失敗を恐れずに挑戦した子供にできたことを実感させ、自信を与える。次の表現に夢中で取り組むことができる。

「いいこと考えた」「もっとこうしてみたい」「よし、やってみよう」など自分で次の行為を考えながら、それが思わず声に出てしまう。そんな夢中の時間が生まれるよう、日々授業をつくりだしていくことが大切。紹介する授業は、おもいをひろげる分科会の立体に表す実践である。これは、造形遊びではないが、共通する部分も多いので紹介する。

4年生「ぶんぐぐんのだんだんランド」では、身の回りの文房具に手足、目をつけてぶんぐくんをつくる。段ボールを切って組み合わせてぶんぐくんのステージをつくっていく。ぶんぐくんのためにどんな空間にしようか考えながらつくる。途中で鑑賞タイムを設けることで、友達の作品から

新たな気づきが生まれる。子供たちの中で全体像が決まっていく。置く場所にもこだわって、最後にぶんぐくんを置く。

この他にうごきだす分科会の造形遊びの実践を紹介する。4年生「みつけよう！すてき色水ワールド」では、ただ並べるだけではなく、積むことによって見え方、やりたいことが広がっていく。方向を変えて、下や横からみることで、「もっとこうしたい！」を喚起していく。波プラスチックに色をためる、透明容器に卵パックを入れて色を重ねるなど様々な試行があった。

授業をつくるときに、子供の思いを広げるために、豊富で目新しい材料、場の設定を考えてしまいがちであるが、そうすると子供の夢中を捉え間違ってしまうことがある。限られた環境・子供との関わりの中で子供の思いを広げることを教師が創意工夫する。そのことで、子供の夢中に迫れるのではないか。

2 参加者から

(質問) ぶんぐくんは解体してしまったのか。

(回答) もとにもどす設定だったが、子供はもどさなかった。授業を終えた三年後も、まだ、作っている子がいる。

(感想) 絵や立体に表す活動にも、材料との対話がある。それは造形遊びにつながる部分である。

(感想) 1年生で色水の授業を行っている。水が流れたり、きらきら光ったり、白い台に色が写ったり。様々な表情を楽しめ、大きい学年でもできる活動。

3 助言者から

分科会のテーマについてであるが、「子供の夢中から生まれる ～今をつくりだす 図工の時間～」を研究主題に、つながる・うごきだす・かかわる・おもいをひろげる・からだでかんじるの5つの分科会で19本の授業を行った。今回の提案者の分科会では造形遊びの授業は行っていない。そのため、研究紀要P.44 には造形遊びの資料はないが、配布資料及び本発表の中では造形遊びについても触れていく。

造形遊びの要素はどんな題材にも入っている材料体験である。色水の活動では、幼稚園のころから、オンリーワンの自分の色を見つけて、場所を決めて並べる。その授業が、中学年以降での造形活動につながる。中学年になると「高さ」を出し、どこから見るのか。高学年になると場所や自然の光の環境を生かすなどの活動に発展する。子供が体験から自分で選び取ることが大切。造形遊びは大変だけど実践してほしい。それが他の題材にも生かされていく。場所や空間も材料として考えると造形遊びの授業がつくりやすい。絵の具は描きたくなるから、造形遊びにするのは難しいが、指導者がねらいをさだめて行えば造形遊びにもできる。

子供が自分で決める、子供の中で起こっていることをみとって共感することが、子供の自信、自主性につながる。大人が子供のやることを決めてしまったり、「〇〇に見えるね」と気安くいってしまったりすることをせず、子供が決めていることを見守って、子供の豊かさを広げていってほしい。子供と柔らかい頭でかかわってほしい。

【本日の配布資料】

- ・昨年度の関ブロ東京大会の紀要、報告書より、城南大会研究について
- ・報告書より、造形遊び実践:みつけよう！すてき色水ワールド

分科会2（A表現 造形遊び）—b 栃木県 小学校

材料の使い方による表現の違いを楽しむ

- 提案者 笹竹 大樹（宇都宮大学教育学部附属小学校）
- 助言者 谷仲 俊彦（栃木県総合教育センター指導主事）
- 司会者 河上有美子（宇都宮市立西原小学校）
- 記録者 橋本 恵一（茂木町立須藤小学校）

1 提案者から

(1) 提案内容の要旨

本題材は、様々な材料を使った簡易的なスタンプによってできる形や色を楽しむ造形遊びから発想を膨らませ、見立てを基に思い付いたものを表していくものである。材料とかかわりながら表したいものをイメージして表現し、友達とよさや面白さを見つけられる展開を目指した。



(2) 題材の内容

題材名 「ふしぎなかたちの いろいろスタンプ」

目標 様々な材料でつくった版による形や色から想像を膨らませ、思い付いたものを版の材料や向き、使い方、色、組合せ方を工夫して表すことができる。

- ・どのように子どもたちの発想を引き出したのか→造形的な要素に注目、友達との関わりの中で表現を見付けさせたい。

(3) 題材の内容（授業実践）

第1時には、洗濯ばさみ、ペットボトルキャップ、紙コップなどを材料として提示し、これらを使ってスタンプ遊びの活動を行った。導入では、同じ材料でも押し方の工夫によって様々な表現ができることに気付けるようするため、「向き」「使い方」「色」を観点として示しながら、スタンピングの仕方を例示して見せた。表現活動ではロール紙を用い、自由に活動場所を選んで取り組めるようにし、活動の中での自然な交流を促せるようにした。終末で自分で版にしてみたい材料を探してくるよう促すことで、生活の中の様々なものの形に目を向けられるようにした。

(4) 成果と課題

【成果】

スタンプの材料として身の周りにあるものを取り扱ったことで、子どもたちの関心を高めることができた。また、第1時の導入で洗濯ばさみを様々な向きで押した形を例示したことにより、子どもたちは他の材料でも1つの押し方を試した後、向きや使い方を変えながら何度もスタンピングしていた。材料の使い方とそれによって生まれる形の一例を示したことは、同じ材料でも工夫によって多様な表現ができることに気付かせる手立てとして有効であったと考えられる。

また、第1時のロール紙を用いた表現活動により、子どもたちは近くの友達とスタンプの形から見立てたものを伝え合いながらテーマを設定したり、つくりたいものの表し方を一緒に考えたり、見つけた形や押し方の技法を紹介し合ったりしていた。友達とのかかわりの中で、新たな発想の

きっかけを得たり、表し方のバリエーションを増やしたりすることができた。また、教室の周囲につくったものをすぐに貼れる環境を用意したことで、子どもたちは活動の合間に友達の表現を見たり、どんなものをどんな風に工夫しながらつくったのかについて友達と話したりしながら鑑賞している様子が見られた。これらの支援が友達とのつながりを生み、個人の表したいことを見付けながら表現していく活動につながっていた。

【課題】

「スタンプした材料の形を生かす」ことを題材の中心に据えていたが、実際の活動の中では版を引きずった線を使って絵をかいている様子も散見された。自由に形をつくりたい、という子どもの思いの表れであったと考えられる。材料をスタンプした形の魅力をより感じられる導入の工夫や最初に提示する材料の選定、また、友達との交流の中で多様な表現の工夫に気付けるようにするためのさらなる手立てが必要であった。

2 参加者から

- Q 各自作り始めると、自分の作品に友だちが関わることに無理が生じるが、ロール紙を使うことで無理なく関わり合うことができ、交流が盛んになっていった。使ったスタンプが、混色しないようにする工夫等があったか。
- A 使ったスタンプは、同じ色の前に置きその色専用とすることで混色しないようにした。
- Q 表現するのによかった素材、また、思うように行かなかった素材は何か。
- A 向きによって形が変わる物を主に選んだ。ダブルクリップは押し方が難しかったようだった。洗濯ばさみなど△○□のはっきりした、形を組み合わせやすい素材を選んだ。

3 助言者から

【材料について、選ぶポイント】

- ①「身近であつかいやすいこと」
- ②「形に特徴があり、組み合わせることでの発展性があること」
- ③「具体物が見えやすいもの（うさぎ、建物など）」

これまで児童がどのような素材を経験したことがあるか、把握することが大切。幼稚園、保育園での経験があれば、より発展的なことが可能となる。

子どもにとって、その材料が持つ意味、価値を教師が把握しておくことも大切な視点である。

また、スタンプの引きずりについては、スタンプで線を表現できる方法の提示し（ひもを木に貼り付けてみる、あるいは、描き足させるなど）表現させる方法もある。

さらに、児童の想定外の活動は、そのときは課題だが、その後の大切な改善材料となる。

【観点の提示について】「向き」「色」「形」

児童にとって活動の方向性を示し、楽しく取り組むことへのきっかけとなる。教師にとっても評価の観点となり、自身のふり返りにもなる。場合によっては、子どもの表現の可能性を狭める可能性もあり、教師自身の検討も必要である。

【表現の違いを楽しむことについて】

同じ材料を使っても、色や向きで表現が変わり、そこから新たな世界を作り出すことができる。また、個人だけでは気づけないことを友だちと気づきあえることが大切である。

材料とかかわり 友達とつながる造形活動を引き出すお花紙の魅力

- 提案者 田村 麻子（高崎市立中央小学校）
- 助言者 前島 隆宏（群馬県教育委員会指導主事）
- 司会者 黒澤 馨（高崎市立京ヶ島小学校）
- 記録者 新井 友康（高崎市立下室田小学校）

1 提案者から

今回の提案のために、お花紙と子供との関わりを3年間行ってきた。お花紙は切ったり丸めたり加工が容易で、触った感触も両面で微妙に異なり、造形的な面白さがある教材であると考えている。このお花紙を用いた造形遊びを、どうしたらみんなで楽しめるかを一番に考え研究に取り組んできた。

(1) 「材料とかかわり」

お花紙を含めた造形活動を、2時間ずつ5つの教材で行った。それぞれの題材で扱う材料には子供達が造形遊びで魅力を感じられるものを選定し、段階的に作品づくりを行ったおかげで、造形活動が苦手な子も徐々にそれらの材料で作品をつくることができた。その際、他教科と横断的に造形遊びを行うことで、材料集めの段階から子供達に関わらせることができた。

(2) 「友達とのかかわり」

友達とつながるために、活動の場は広く、友達との距離は近くを意識した。材料は活動場所の中心に置くことで、どこからでも取り扱いやすく、自然な交流の場が生まれるよう心がけた。また、2～3人で一台のデジタルカメラを用意し、お互いの作品を撮影するなかで、道具を通しての交流も行えるようにした。

〈扱った題材（5×2時間）〉

- ①「すきないろ みつけた」～500mLのペットボトルや蓋の出来る瓶などに食紅で作った色水を入れた。自分の作った色に自分のイメージで名前を付けてお互いに紹介しあい、教室や校庭の好きな場所において楽しんだ。光が透けたり影が出来たりした様子をデジタルカメラで撮影してタイトルを付けた。
- ②「どんどん ならべて」～並べる物を自分たちで用意し、細長い廊下や体育館で活動した。廊下では長さを意識した作品が多かったが、体育館では広さがあるため形を意識した作品ができた。デジタルカメラでお互いの作品を撮りあうことで、自然と作品の交流会が行われた。
- ③「しんぶんしと なかよし」～新聞紙をちぎったり、引き裂いたり、丸めたり、巻き付けたり、様々な形を変えて遊んだ。
- ④「いろと かたちと ひらめき」～この活動でお花紙を材料として扱った。透かしたり、丸めたりと、前時の新聞紙での学習を思い出しながら、自分達が思う方法で思い思いにお花紙に関わっ



た。お花紙は加工が容易なため、お花紙と糊とテープなどで、色々な作品ができた。1年目は白い台紙の上で作った物を糊付けして作品化もした。出来上がった作品をデジタルカメラで撮影することで、一人一人の作品の見え方を相手に伝え合うことができたり、言葉以外でも相手と関わり合う場面ができて良かった。

- ⑤「いろいろな はこから」～様々な色や大きさ、形の違う箱を用意して、並べたり、積み上げたりして楽しんだ。

造形遊びを扱うなかで題材を通して何を身に付けさせたいかを大切にしないと、こちらの意図が子供達に明確に伝わらないと感じた。また、三年間造形遊びの実践を行い、そのうち二年間はお花紙に関わったが、お花紙は可能性がある教材だと感じる反面、決して子供の表現したい気持ちが全て表せるような万能なものでもないと感じた。造形遊びは学年は違えども、段階的に小学校から中学校へと継続的に取り組み、繋げていくことが大切だと感じた。

2 参加者から

Q：造形遊びをすることで、子供達一人一人にどのような変容がみられたと感じるか。

A：材料に対する見方が良くなり、「これは何に使えそうだ」「これは何に見える」など、様々な意見がでるようになった。また、児童同士のお互いの交流が自然に生まれ、図工を通してお互いの良さを見付け合うことができるようになった。

Q：今回自分はお花紙を中心に造形遊びに取り組んだが、参加者の皆さんの学校で、同じようにお花紙で造形遊びをしたことがある学校はあるか。

A：窓ガラスにお花紙を貼って、光を透過させたり丸めたりして使った。

3 助言者から

造形遊びは学校での取り組みとして、発達段階に応じてしっかりと取り組んで欲しい。低学年の内に全十時間をかけて色々な材料を系統的に取り組んだことにより、子供達にとっても良い経験ができたと思う。今回の造形遊びで得たものが、今後の絵や立体作品に活かされていくことは容易に想像できる。お花紙は「ひねる・やぶる・丸める」など、色々な加工の可能性があるし、値段も手頃で素材として扱いやすいと思う。また、軽いので、「並べる・繋げる」だけでなく今回のような扱いも良いのではないかと思う。水に入れると溶けてしまうが、水に入れての加工も可能性があると思われるし、色々な子供達の思いを受け入れることが大切なので、水に溶かして表現するのも面白いと思う。以上のように、素材として非常に魅力的な材料であると思われる。普段の図工作品は絵や立体に自分の表現を表す意義があるが、造形遊びは結果的にそれらの作品に繋がっていくものであり、造形遊びが作品として残らなくても、そこで得られる資質や能力は今後の子供達の作品制作に繋がるものであるから、今後も是非とも造形遊びを頑張っていって欲しい。

材料とかかわり 友達とつながる造形

- 提案者 井澤映里子（甲府市立山城小学校）
- 助言者 小田切 武（甲州市立神金小学校教頭）
- 司会者 鷹野 晃（北杜市立明野中学校）
- 記録者 五味 一也（笛吹市立御坂中学校）

1 提案者から

本題材は、ひとつの単元の中で3つの鑑賞活動を行うことを狙った授業である。実際にこの授業を実践したのは約1年前のことであるが、時間がたっているにも関わらず、今回の提案のために、子供たちに当時作った作品についての説明を求めると、まるで昨日のできごとのようによく覚えていることに驚かされた。作品や創作活動というものは、実体験として深く子どもたちの心の中に残っていくものなんだということを改めて知ることができた。



2 参加者から

- ・ どういう視点で素敵だと思うかがよくわかった。
- ・ ワークシートのつくり方が素晴らしい。
- ・ 4つのカードが山梨の特徴である。授業者の場合、その授業で説明すべき点が焦点化されるのでやっている。
- ・ 子どもと見方を共有できるのは素晴らしいと思う
- ・ 冊子、ワークシート、これは1年ごとまとめるのか
- ・ 4つのカードは山梨全体で行っているのか？免許がない人が増えているのでこういう動きが広まればいいと思います。
- ・ 集めてしまうこともあるけれど、拾ってきたら素敵だった、ということもありますか？
- ・ 集めてから友達のものが良く見えた、ということもあった。

そのほか、研究会の参加者による感想カードには次のような意見が記されていた。

- 大人にとっては何でもないものが、子どもにとってはすてきな「たからもの」。子どもたちにとっては、好きなものを集めてわくわくする題材だと思いました。やってみたいです。
- 図工で身につけさせたい力を子ども自身に意識させることはとても参考になった。ぜひやってみようと思う。
- 見通しの部分ですごいと思いました。年間でワークシートをまとめることは考えたこともありませんでしたが、学期ごとに貼るなど、今まで聞いたことのない内容が聞けて興味深かったです。
- 「素敵」という言葉で題材づくりと視点を持って取り組むことで、今後の学習の材料集めでも役立ちそうに感じました。私も実践してみたいと思いました。

- 豊富な材料あつめ。それぞれの子どもの思いが詰まっている。子どもたちの世界観がそれぞれ素敵。「色や形」「すてき」という視点が良かったか。
- 重ねる，並べる，入れる，貼る，乗せる，はさむ，つなげる・・・という視点をあげることで，飾り方が広がったと思う。
- ワークシートが同じ形式でまとめられてあり，学習の見通しや振り返りができてよいと思いました。鑑賞表現をリンクさせていて，見方，感じ方が深まると思いました。
- 児童各自がいかに「すてきなもの」を質・量ともに持ち寄れるかがキーになると思うので，お互いに刺激しあってたくさん集まったことによってよい作品作りにつながれたと感じました。
- 色・形・素材感など，造形的な視点を与えてから，「すてきなもの」の説明を言葉で表現することで，抽象的な「すてき」が，造形につながる基礎力につながっているのだと感じました。2年生でも充分できるのですね。積み重ねが大切と思います。
- 図工の学習プリント参考になりました。低学年だと書くのに時間がかかるので，言葉のみで話して終わりにしていたのですが，書かせたいなと思いました。
- ワークシートでの学びの積み重ねが効果的だと思いました。取り入れたいです。
- △私も，どこにでもあるものや，普段なら捨ててしまうものが図工の時には“宝物”，すなわち“財”になると思います。ふとした瞬間に「いいな！」と感じる感覚が図工ならではの楽しみ方だと考えました。
- △4つのめあては出さない方が良い場面もあるだろう。広い視点，感覚を働かせるために。（子どもの活動の邪魔になることもある）
- △集めた材料を並べる活動を“造形あそび”的な活動と捉えるのであれば，机の上だけでなく，床や階段なども使えるとよかったと思う。
- △鑑賞題材というよりも立体の作品作りの中にある鑑賞と素材体験なのではないでしょうか。

3 助言者から

- ・4つのカードは授業のねらいを重点化した。題材を関連させていくことが大切である。この授業では鑑賞の中に造形活動があった。ひとつの題材の中にいくつかの鑑賞が統合されていた。金沢大の先生は「日本人には俯瞰して総合的に考える力が弱い」と言っていた。これは日本企業に外国人のCEOが多いことからわかる。2つの視点について。図工は楽しいけど，どのような学びがあるのかわからない。カリキュラムマネジメント，これは教科書題材である。自分がどういものが好きで，どういものが嫌いなのか，共通事項の視点で見ることが大切であろう。「野生の思考」やベンヤミン「複製化時代の美術」からも学ぶ点が多い。材料に主体的に関わるという点においては学びの多い授業であったといえる。



つながる 広がる 図画工作

- 提案者 椎野 越子（新潟市立白根小学校）
- 助言者 永井 高志（新潟市立早通小学校校長）
- 司会者 齋藤 暢（新潟市立横越小学校）
- 記録者 小日向真理子（新潟市立亀田西小学校）

1 提案者から

新潟市で2018年に開催された「水と土の芸術祭」の子どもプロジェクトでは、アーティストを招き、子どもと一緒に造形活動をする取り組みが行われた。その1つに『どんどこ！巨大紙相撲』の実践がある。巨大紙相撲とは、段ボールで全長160cm程の力士をつくり、合板等で作った大きな土俵上で対戦させるものである。もとより、アートイベントには、社会を楽しくするしかけがある。そして、今回の相撲大会開催までのプロセスの中には、造形活動を通して友だちや社会と「つながる・広がる」図画工作の可能性が数多く見られた。



造形活動としてのしかけは、ダイナミックなサイズにある。巨大であることの最大の良さは、チーム戦にすることで、チームの力士をどう作るかという検討を重ねることを通して、友だちとの関わりが生まれることである。より強い段ボール力士を生み出すために、他者と関わりながら創造する楽しさを実感することができる。また、大会当日に他校の力士の出来や面白さを見る活動は、鑑賞にもつながる。スポーツイベントとは違うアートイベントの良さは、活動することだけでなく、作品を見合うことを通しても会場の全員がつながることができることである。

「すもう」という題材の良さは、伝統文化や社会ともつながることができることにある。「立派な巨大力士を作りたい。」という作品への思いが、相撲の歴史に目を向けたり、「技名・四股名・タニマチ」といった相撲文化に興味を広げたりすることにつながった。

こうして、アーティスト土谷さんとの出会いが、新しい材料との関わり、他校との関わり、文化や社会との関わりへと活動を広げることができた。

問題点は、普段の授業の中で、このようなダイナミックな活動の展開が難しいことである。しかし、普段の授業の中でも、材料と思う存分に関わる経験を積み重ねることで、活動は自然とダイナミックに広がっていくものである。

友だちとつながる造形遊びがら工作へ、新聞遊びから人形作りへ、大きな紙の見立て遊びから絵画作品へ。絵や立体は、材料との関わり方の経験をもとに膨らんでいくといえる。

2 参加者から

- ・学校を飛び出したイベントのダイナミックさに驚いた。造形遊びが基盤になっていて面白い。ところで、イベント会場への参加は土日なのか。土日だと時数はどうなるのか。

- ・ イベント会場への送迎は、保護者。時数はカウントされていない。
- ・ 他に、造形遊びから工作、創作へとつなげる実践や教科を飛び越えた活動があったら紹介してほしい。
- ・ (他県参加者より) 展覧会時に、学校全体のいろいろなフロアを「造形遊び期間」として解放する取り組みが面白い。体育館で造形遊びをしてそのまま展示する、廊下で造形遊びをしてそのまま遊んだままの配置を展示するなど。遊んだそのままの姿が会場に設定されることで、見え方が違って来る面白さがある。
- ・ 子ども同士が自然発生的にかかわる場や環境の設定には、何が大切か。
- ・ (山梨発表チームより) 山梨では、例え造形遊びであっても「4つの観点」を提示することから授業作りをしている。授業の目標そのものを子どもたち共有することが、場や環境の大きな工夫といえる。目標を理解して授業に臨むことで、自然と「やり方」に着目して関わるができる。

3 助言者から

図画工作の授業において、最終的に目指していることは、図画工作科における「資質・能力」を児童が身に付けることにある。当然、授業における本時のねらいにも、児童に身に付けてほしい資質・能力が述べられることになる。そして、その資質・能力を身に付けさせる手段が、「主体的・対話的で深い学び」である。つまり、目的は、児童が資質・能力を身に付けることであり、「主体的・対話的で深い学び」は手段でしかない。

「深い学び」の鍵として、「見方・考え方」を働かせることが必要である。図画工作科ならではの物事を捉える視点や考え方(造形的な見方や考え方)を明らかにし、それを働かせることと捉える。

子どもの表現活動は、大人のようにある程度のゴールイメージを持って始めているのではない。人やもの、こと等の関わり合いを通して、その時々でイメージが浮かんで消え、変容し、最終的に自分が「これでよい」と納得した時点の表現がゴールになっていると考える。しかし、子どもがその時点で最終表現と決めても、時間が経てば、またあることを思い付き、表現を再開し、表現が変わることは十分考えられる。だから、子どもが授業開始時に持ったイメージと、授業最終時の表現を単純に比較し、変容しているから「深い学び」があったと考えるのも違うのではないかと思う。子どもの表現は、時間と共に常に変わっていくことがむしろ自然といえる。

図画工作科でいう「深い学び」とは、子どもが自分の最高の表現を求め、様々に試行錯誤的に取り組む姿そのものが「深い学び」の姿と言えるのではないかと考える。子どもは、誰かに指示されずとも、自分の表現や表現方法等に疑問を感じ、その解決を求めて友だちの考えを聞く。その媒体は、言語でも文字でも構わない。それによって、自分が納得していく過程が「対話」である。また、友だちの表現の良さを視覚的に捉え、自己内対話を行い、それを自分の表現に活かしていくことも十分に友だちとの関わりである。



気づくかがやき 広がるそうぞう力

- 提案者 長阪 浩倫（藤枝市立青島小学校）
- 助言者 道越 洋美（藤枝市立大洲中学校教頭）
- 司会者 寺田 明子（藤枝市立高洲小学校）
- 記録者 宮城嶋理重（静岡市立清水三保第一小学校）

1 提案者から

前任校の葉梨小は、自然豊かな小学校である。

「あつめて ならべて いい感じ」の導入では、廊下で待っていた子ども達が教室に入って来て、教師が窓に貼ったクリアケースの中に、五色のお花紙がはさまれたものを見つける。お花紙が短冊状に切つてあるものを、「三色を選んで、好きに重ねて、形を変えて遊んでいいよ。」と伝え、三色でも混色しながらいろいろな色ができることに気づいた。作ったものを、窓の光を通すことで、きらきら光る様子が見えるように、表現と鑑賞が一体化できる教室環境を工夫した。



年度当初、「だから図工は嫌いだ。」と度々呟くA児が気になる。「だから・・・」と言うのは、今まで努力しても満足できなかった経験、本当は満足したい心情から出る言葉だと思い、何としてもA児の満足いく題材を工夫したいと思った。

五色のお花紙は形をちぎったり、色を重ねたりすることで、その子なりの「ミラクルペーパー」になる。ミラクルペーパーの中に、何かの形を見立てて切り取ると、犬や恐竜が飛び出し「やっと出てこれた！」と話し出す。このように自分の授業作りにおいては、子ども達がわくわくするように導入を工夫している。

「だから図工は嫌い」と言っていたA児は、試行錯誤を繰り返し、友達と対話を重ねながら、自分のミラクルペーパーをじっと見つめ、形を切り出していった。授業の終末では、自分から教材提示装置にのせに行き、投影。その時は他の児童と話して、楽しそうに投影するA児の姿が確認できた。色の重なりを見て「すごいのができた！」と感激するA児。「ミラクルペーパー」では、初め、「切るのがもったいない。」と意見したが、少し話すと納得して、「わかった。この中からドラゴンを切り出す。」と言い、楽しそうに作り始めた。10月終わりまで、A児は図工の時間に満足のいく作品を仕上げることはできなかった。たとえ作品を教師がほめても、自分で色や特定の部分が気に入らなかったり、段ボール工作では、初めに手がけた部品（片足）のサイズが大きすぎて、全身を作るには到底時間が足りなかったりしていた。しかしこのお花紙を使った、一連の授業後の振り返りには、すべて◎が付けられていた。この題材を通して、A児をはじめ、多くの児童は資質・能力を発揮することができたのではないかと感じている。

2 参加者から

質問1 「五色のお花紙を三色になったのは、児童からですか？」

教師が「五色から好きな三色を選んでください。」と働きかけた。三色にすることで、三原色を選んだ子は色の種類がとても広がったが、三原色で選ばなかった子は、あまり色が広がらないこと

に気づき、「やっぱり先生、色変えていい？」と来た。クリアケースの中では、色の変更が容易にできる。「紫を作りたい。」という思いから、その子には、赤と青を重ねることで紫ができるという学びがあった。

質問2 「お花紙を切った後、パラパラすると思うが、それをどのように展示しましたか。」

「ミラクルペーパー」で切り出したものを構成して、一枚のお花紙に洗濯糊で貼り、ラミネートして絵の作品に仕上げました。レオレオニの絵本のような感じの作品になった。

分科会の感想から

- ・どの導入も子どもがわくわくするような内容ばかりで、工夫がとても素敵でした。他教科との関連もあって、つながりに興味をもつことができているなと思いました。
- ・長阪先生の子どもに寄り添う姿勢が素晴らしいと思いました。導入であんなに力を使うことが自分にはなかったので、こんな図工だったら楽しみで仕方ないだろうなあ、と思いました。
- ・フルバージョンで発表を聞いたかったです、垣間見ることができてよかったです。
- ・導入にこだわる先生の熱意が素敵です。高学年ではどんな風に先生が授業するのか気になります。
- ・お花紙を3枚重ねる→絵の具だと、苦手な子は濁らせてしまい、美しさを感じられない。お花紙なら誰が重ねても美しく発色し、色そのものの美しさを存分に味わえる。
- ・ファイルを使い、何度も試せるのもいいと思いました。

3 助言者から

藤枝市の図工の教科書は開隆堂で、「あつめて ならべて いい感じ」はその中に掲載されている題材であるが、「ミラクルペーパー」からは、長阪先生のオリジナル実践である。長阪先生は普段から子どもに寄り添った指導や支援を行い、子どものことをよく見ている。子どもに対して、この子はこんな力をもっているから、この題材でその力を引き出そうという謙虚な思いを常にもっている。2年生の子ども達の前でも、「図工の勉強をすることで、こんな人になって欲しいんだよ。」という願いを熱く語っている。これからの図工教育では、これまで以上に何のために図工や美術を学ぶのか、何をできるような資質、能力を身に付けさせるのかを明確化する必要がある。子ども達にとって図工は作品を作ることや対話をすることが目的なのではない。来年度から本格実施される新学習指導要領の解説9ページには、教材の目標が示されているが、今回の改定のポイントの一つは、子どもが何をできるようになるのか、ということを確認にすることである。そのために図工では、どのような資質・能力を育成するのかということ、私たちはしっかりと理解する必要がある。山梨県の実践発表でも言及されていたように、現行で示されている4つの資質・能力が3つに整理された。国語、算数、理科、社会等他教科も、このように3つの目標に統一されている3つの資質・能力で整理されたのである。これは、どの教科においてもこの力を育成して欲しいというメッセージでもある。今回の長阪先生の授業実践では、子ども達の姿から、特に(2)の思考力・判断力・表現力の資質・能力が存分に発揮されていることが感じられた。創造的に発想や構成をするだけでなく、自分や友達の作品の過程や完成したものに対する見方や感じ方を深めたりすることは、鑑賞の力も磨いている。4つの資質・能力が3つに整理されることで、これまでの(1)関心意欲態度(2)思考(3)技能(4)鑑賞という内容を統合し、他教科と見比べ、教職員で目標を共有できるという利点も考えられる。

長阪先生の実践は、子ども達に教えたことを押しつけるのではなく、教材研究をしていく教師の力で資質能力を引き出すことができるという、これからの図工授業への提案であった。

自ら形や色、表現方法などを考え、自分らしい表現を追求する児童の育成 ～絵に表す題材における「図工の種集め」を通して～

- 提案者 佐藤 潤子（伊勢崎市立殖蓮小学校）
- 助言者 足達 哲也（群馬県総合教育センター指導主事）
- 司会者 狩野 洋平（渋川市立橋北小学校）
- 記録者 稲木 千坂（渋川市立古巻小学校）

1 提案者から

絵に表す活動において、児童から「これでいいですか。」「次はどうしたらいいですか。」という質問を受けることが多い。そのため、自ら形や色や表現方法等を考え、自分らしい表現を追求する児童を育成したいと考えた。

児童には自己決定できるようになって欲しいが、全てを自分で考えることは難しいため、手がかりがたくさんあると創造活動が楽しくなるのではないかと考えた。そこで、「図工の種集め」という、試したりその結果を共有したりする活動を行った。



「図工の種集め」は、「できそうなことを思い付く」、「構想する（下絵に表す）」、「表現方法を選んで表す」の3つの場面の前に設定することにした。全ての場面の前で必ず行うのではなく、種集めをすることが一番適している場面で1回取り入れることとした。

第2学年の「たのしく うつつして」は型紙とローラーを使い、表したいことを型紙版画に表す題材である。この題材では、「できそうなことを思い付く」場面の前に「図工の種集め」としてローラーで試しの活動を行った。児童は、友達の様子を見て参考にしたり自分で表現方法を思い付いたりしながら取り組んでいた。試作品は「型紙の技」「ローラーの技」「置き方の技」「色の技」の4観点で分類し、良いと思う表現方法を見つけられるようにした。その後「見付けた技を使って楽しく表そう」というめあてで活動に取り組んだところ、児童は表れた形に次は何をしたら良くなるか考えることが出来ていた。

第4学年の「わすれられないあの時」は、運動会で心に残った場面を思い出し、絵に表したい気持ちや様子が伝わるように、画面の構成を考えたり表現方法を工夫したりする題材である。この題材では、「構想する（下絵に表す）」場面の前に「図工の種集め」として関節が動く紙人形と4本の黒い短冊を使って試しの活動を行った。児童は、二人組になり表したいポーズを取り合い、その形を紙人形で表し、短冊を使って構図を決めた。その後、全体で鑑賞し、互いの考えを共有し、それをもとにもう一度試しの活動に取り組んだ。このことにより、自分の考えを見直したり、下絵にうつつ場面でも悩まずに構図を決めたりする様子が見られた。

成果としては、「図工の種集め」を行い様々な手がかりをつかむことで、自己決定する力が付い

たことがあげられる。また、課題としては、「図工の種集め」に継続して取り組んでいくことと、題材に応じた「図工の種集め」を工夫していくことである。

2 参加者から

- ・ローラーの試しが良く出来ていたが、それを作品として使いたいと思った児童はいたか。
→試しが作品になった児童はおらず、もっと試したいと思う程度で活動は終了した。
- ・紙人形を使ったことがあるが、横向きの構図しかできなかった。上から見たような作品もあるがどう指導したのか。
→紙人形では出来ないポーズがある。「できない。」と言う児童もいたので、立体の人形を使わせた。
- ・「これでいいですか。」と聞かれたら、何と答えているか。
→どうしたいと思っているのか聞き、児童から話させたり、他の児童の様子を見に行かせたりして、自分で考えられるようにしている。
- ・東京では描けない山の絵の作品があり感動した。群馬県ならではの作品や文化をもっと見てみたかった。学習指導要領にとらわれているように感じる。品川区では区の学習指導要領があり、児童の実態に沿ったものや地域にあったものを大切に考えている。その県や地域の魅力や文化を生かしたり、大切にしたりして欲しい。

3 助言者から

学習指導要領に示されているものも、地域に根ざしたのものも、目指していることは何であるかがはっきりしていることが大切である。説明されていないところをどのように解釈して指導していくのかというところが、教師の責任である。

第2学年の題材では、表したいことを見付けることが課題であるが、自己決定させるために試した作品を共有して整理する活動を行っている。

第4学年の題材では、どのように表すかが課題であり、試して共有することで、新しいことに気付かせたり自分だったらと考えさせたりし、深めることが出来た。

児童にどのような資質、能力を身に付けていくのかを考えて実践することが重要である。



分科会4（B鑑賞）—a 長野県 小学校

1～9年生をつなぐ【全校アートWeek『ここに穴があいたら・・・』】

- 提案者 常田 浩二（信濃町立信濃小中学校）
- 助言者 徳嵩 博樹（長野市立城東小学校教頭）
- 司会者 長崎 至宏（長野市立古里小学校）
- 記録者 北澤 公浩（長野市立南部小学校）

1 提案者から

私が勤務する長野県信濃町立信濃小中学校は、8年前に近隣の学校が統合して校舎一体型の小中一貫校として開校した。全校が2つに編成され、1～4年生が初等部、5～9年生を高等部としており、高等部は全て教科担任制をしいている。

本校で勤務するようになってからしばらく経ち、小中一貫校としての特色が生かせていないのではないかと思うようになった。特に自分の専門教科である図工美術に

おいては、初等部と高等部でつける力の繋がりが意識できていないことを感じた。そこで、新学習指導要領の資質・能力をベースに、図工美術でつける力を9年間分まとめたカリキュラムを作成した。このカリキュラムについて広くご意見をいただこうと、職員会議だけでなく、県内外から参観者が来る学校公開授業の折にも多くの先生方に発信してきた。

しかし、初等部の教員からは、「図工が分からない」という悩みの声がなくなることはなかった。初等部への出前授業も行ったが、「図工美術が専門の教員だからできるんだ」と一刀両断されることもあった。理念を伝えるだけでは浸透していかないことを痛感した。

そこで考えたのが「全校アートWeek」である。これは、1～9年生が同じ題材に取り組み、全学年の作品を鑑賞し合うことで、発想や表現の良さを学び合うという試みである。そして、抵抗感なくできる短時間題材で、1年生でも楽しく表現し、9年生でも表現を追求できる内容にしようと、架空の穴の中の世界を想像して表す「ここに穴があいたら」という題材を提案した。画用紙を穴の形に切り、その中に表したい世界を描き校舎内の壁や床などに貼って鑑賞し合うという造形活動である。初等部の教員が理解し、安心して授業ができるようにと、この題材における各学年に応じた授業の展開例の他、導入の仕方や児童・生徒への声のかけ方、発達段階に応じた用具などを一覧にした系統表も作成した。「全校アートWeek」を提案してから、ある1年生の教員より、「絵本の読み聞かせで導入するなら、このような面白い穴の絵本がありますよ」と助言があった。また、図書館司書の方は、「穴」にまつわる本のコーナーを図書館内に作ってくれた。社会科専門の教員も興味をもち、自身で作った作品を校舎内にこっそり展示していた。「図工が一番分からない」と言っていたベテランの教員は、「穴の中の世界を描いてから、そこにいろいろな形の枠を置き、『いいな』と感じたところでなぞってから切ると、穴のようになってとてもよかった」と教材研究をしたことを話してくれた。このように、「全校アートWeek」が、まずは図工美術を考えるきっかけになったことに、本校として大きな価値があるように感じた。

全校で同じ題材で取り組んだことにより、各学年でどのような表現が生まれるのかが見えてきた。1～3年生は、穴の中に各々の好きな空想の世界を楽しく想像して表していく児童が多かった。4年生では、表現したい世界に合わせて穴の形を決めたり、既習の経験を生かしたりする姿な



どが見られた。5～6年生では、さらに発想豊かに穴の形や穴の中の世界を想像していく姿が見られた。また、場所にかかわる表現をする児童が数人見られた。7～8年生では、場所との関連が明確に表れ始めるとともに、描画材も広がりを見せ、今までの経験からパステルやコラージュなども使って様々な表し方で表していく姿が見られた。9年生では、「昼間に大好きな夕焼けを見ることができる穴」をトリックアートのように浮き出て見えるよう工夫して表すなど、表現のストーリーが生まれ、表現への深みを感じられるものが多く見られた。

各学年の鑑賞カードでは、初等部の児童は高等部の作品を鑑賞した際、発想よりも技能面に目を向ける姿が多く見られた。当初、私が考えていたのは、発想構想のよさを学び合うことであったため、鑑賞の視点や授業展開についても研究し、先生方に示していく必要性を感じた。高等部の生徒は、穴の中の世界がどのように表されているのかについて感じ取りながら鑑賞している様子が見られ、技能面だけでなく、発想や表現のよさにも目を向けているように感じた。今回の取り組みを通し、下級生は上級生から技能や表現のよさを学び、上級生も下級生の発想や表現のよさを学ぶことができたのではないかと思う。

2 参加者から

- ・他学年から「何をやったらよいのか」と相談を受けることがある。1～6年生までの流れがあると、図工専科でなくてもやりやすいのではないかと思った。カリキュラムの作成にかなりの労力があると思ったがどのようにしたのか。また、縁が木であったら木の厚みを入れるなど、縁を工夫すると本当に穴があいているように見えるので、より「穴感」がでるのではないかと思った。
→カリキュラムを考えるに当たって、年間指導計画の題材の羅列ではなく、つける力を示していかなければいけないのではないかと思った。どのような力をつけるためにその題材をやるのかを先生方に伝える必要がある。労力もかなり費やした。
- ・鑑賞カードを見た時、よい視点で書かれているなどと思った。どのような方法で鑑賞をしたのか。
→今までの制作の中でどのようなことを考えてやってきたのか、どのような工夫をしたのかの振り返りをする。その中から、鑑賞の視点をいくつか示していくようにしている。
- ・いろいろな学年の子ども達が一つの校舎の中で生活していることを知り、いろいろなことができ楽しそうだった。

3 助言者から

提案いただいた図工美術のよさを広げていこうとする「全校アートWeek」には、9年間のつながりを考えて作られたカリキュラムを基に、友だち同士や教師間を“つなげる”意味合いもあった。初等部の児童にとっては、高等部の生徒の作品を鑑賞することにより、今後の活動への見通しがもてるような題材になっているし、9年生のような高等部の生徒にとっても1年生や2年生の作品を鑑賞することを通し、過去の自分を振り返られるような題材になっている。この点では参考にしていく部分が多くある。課題を挙げるとしたら、前年度の真似をする作品をどう捉えるかということである。“学ぶは真似る”という学びもあるが、教師自身が更に先を見通した発想を追求していくことが欠かせないだろう。最後に、長野県には「ずく」という方言がある。「ずく」とは「惜しまず働く力」という意味で用いられる。図工美術は「ずく」がなければこれからの生き残りは難しいのではないかと感じる。「連携」の在り方を考える上でも、この「ずく」を大切に、先を見通した活動を試みていきたい。

分科会4（B鑑賞）—b 埼玉県 小学校

新たな発想や構想を生み出す鑑賞の取組

～見て！さわって！感じてみよう！～ —身近な素材の鑑賞から—

- 提案者 古屋美恵子（深谷市立花園小学校）
- 助言者 大谷 裕紀（熊谷市立玉井小学校校長）
- 司会者 根岸 由紀（深谷市立岡部中学校）
- 記録者 井上 暢之（深谷市立深谷中学校）

1 提案者から

児童は、さまざまな出会い（人、材料、もの、道具）によって心を揺さぶられる。主体的に対象と向き合い、身のまわりの自然物とふれあうことや、多くの作品を鑑賞しそのよさを理解することで、かかわりが生まれる。そして、作品を通して友達とつながることで、見方感じ方の世界が広がる。これが、児童にとってつくりだす喜びとなり、確かな力となると大会テーマを捉えた。



そこで、児童に素材を鑑賞させ、そのよさや面白さ、美しさを思いのままに感じ取る工夫をし、友人との意見の交流を行っていけば、児童の感じ方や見方が広がり、自身の表現活動の充実につながるのではないかと考え、仮説を立て取り組んだ。そして、この仮説を基に追究していく観点として3つの実践を設定した。

(1) 対象のもつよさや面白さ、美しさをとらえる。

実践1「石でアート」や「葉っぱでアート」に取り組んだ。素材のもつ形、色や感触を味わい、よさや面白さを感じ取ることで自分なりのイメージをもつことができる。また、友人と交流することで、自分の見方や感じ方が広がると考えた。

実践1では、石や葉っぱとじっくり向き合う経験は今までなかったことなので、外で探す段階から意欲的に取り組んでいた。交流の段階では、自分の考えは言っても、友人に対してより具体的な意見が言えず、一方通行なやりとりになってしまうことがあったので、意見の交流が活発に行われ、より深く友人とかかわれる活動の工夫が必要であると感じた。しかし、簡単な言葉であっても、身近な友人から認められるという体験に児童は満足感を得られたようであった。

(2) 自分で確かめ、友人と話し合う（見方や考え方を深める）。

実践2として、「みてみて！わたしのすてき色」に取り組んだ。実践①での反省を踏まえ、自然物から人工物の素材へと鑑賞の対象を変えて、製作につなげる鑑賞を行った。カラーセロハンや透明色紙は透過性があり、並べるだけでなく重ねることで色や形の変化がつけられる性質がある。そうした効果を実際に感じ取らせながら、鑑賞の実践を行った。

実践2では、まず、児童は、カラーセロハンや透明折り紙に十分に触れ、並べたり、重ねたりする活動を繰り返し、色々試しながら美しさや面白さが感じられる色や形を探っていた。また、4～5人の小グループで、自分の見つけた「すてき色」を伝え合い、相手に伝えるときには「こうすることで、こうなった」「この部分のここがきれい」といった点を意識して、言葉で相手に伝えることができていた。児童は友人と意見交換をすることで、自分にはない発想に気づかされたり、友人の一言でアイデアをひらめくことができたりしていた。また、自分の作品を友人が認めてくれたと

いう喜びも感じていた。

(3) 感じたことを自己の表現に生かす。

本題材の経験を経た後に、「すてき色クリスタル」(立体)に取り組み、透過材に光を通したときの見え方を考えて製作を行った。

実践3では、児童のワークシートに「とうめい色紙をかんしょうした時のことを思い出して、どの色とどの色を組み合わせたらいいかを考えることができました。」「友だちに言われたことを思い出して、とうめい色紙の組み合わせを考えました。自分の気に入ったように作品をつくることができました」と思っています」等の記述があった。

このことから、素材に触れたり、友だちの意見を聞いたりしたことで、いろいろなアイデアがイメージしやすくなったと考える。その後のアンケートからも、実際に素材に触れる体験や、「共通事項」を意識して対象を見る体験が役に立ったと実感している割合が高く、『出会い』『かかわり』の経験が、児童にとって大きな糧となっていることがうかがえた。

課題としては、授業後のアンケートから、自分の作品について思いを言葉で伝えることに抵抗がある児童もいることがわかった。友人の作品をみることに興味があり、その作品のよさを見つけることはよくできるが、自身の振り返りまでなかなか気持ちが向かないのではないと思われる。友人との交流の後に、改めて自身の取組や気づきに目を向けさせる声かけや活動の工夫をしていくとよいのではないかと感じた。友人からの意見をもとに、自分の作品をもう一度よく見直し、自身の表現に生かせるようにしていきたい。また、「作品について友人と話し合う」「自分の作品を友人に紹介する」など、言葉による『つながり』の部分が少し弱いように感じた。自分の気づきや思いを、自信をもって十分に表現できるように、他教科等でも日常的に話し合う活動や書く活動を行い、言語活動の充実を図っていきたい。さらに、児童がこれまでどんな造形体験をしてきたか、鑑賞によって身につけた力が今後どういった造形活動に生かされていくのかを明確にした指導計画が重要であることから、カリキュラムマネジメントをしっかりと行っていきたい。

2 参加者から

- ・図工美術で作品を通して色や形を伝えあう活動には、あたたかい言葉がやり取りされます。言語活動において、図工美術の鑑賞の可能性を感じた。
- ・鑑賞に系統性が見られる題材でした。素材を鑑賞して作品作りに取り組むというのが参考になった。

3 助言者から

学習指導要領では、身の回りの作品、身近な作品、自分たちの作品という形で書いてあるが、学年が上がっていくと友達の作品が気になる。児童は友達の作品を勝手に見ている。図工美術は、唯一「カンニング」が許される教科である。その瞬間、どんなことを思ったのか言葉にすることがとても大切である。ここでのテーマは友達とのつながりで、つながりを言葉にしない、言葉に限定しない事が図工のいいところで型にとらわれ過ぎてはいけない。形式を使って言葉をはめていくのでは、求められている「対話的」ではない。教室に貼ってある、発表の仕方の通りに話せたことで満足してはいけない。友達とのつながりを作っていくためには、本提案発表で追究していく観点として3つの実践を設定したが、このような場面設定をすることが大切である。また、友達とのつながりを言葉に限らないところが図工の良さだと思う。

分科会4（B鑑賞）—c 群馬県 小学校

形や色から自分のイメージをもてるようにする鑑賞指導の工夫

- 提案者 森 恵那（館林市立第七小学校）
- 助言者 森坂実紀人（前橋市教育委員会指導主事）
- 司会者 金子 桂子（板倉町立西小学校）
- 記録者 田中 良子（太田市立葎川西小学校）

1 提案者から

図画工作科で求められている「感性や想像力を働かせて、思考・判断し、表現したり鑑賞したりするなどの資質・能力を相互に関連させながら育成すること」を指導するために、表現と一体的に行う鑑賞活動に各学年で取り組んでいる。本題材は、児童が形や色やイメージを意識して表現や鑑賞に取り組めるようにするために設定した。

大会テーマの「出会い かかわり つながる造形」に関する内容としては、様々な技法（フィンガーペインティング、コラージュ）との「出会い」、友だち同士で鑑賞し合う「かかわり」、そして既習事項で表現する「つながり」を意識した。

指導計画における指導の流れを「鑑賞→表現→鑑賞」とした。最初の1時間で、教師の参考作品や、元永定正の作品を鑑賞し、イメージを表現した絵画を読み解き、次に取り組む表現への見通しを持たせた。表現では、フィンガーペインティングで自由に表現させ、自分のイメージした世界をつくった。テーマを先に決めても、製作過程で想像を広げ作品を仕上げても、どちらでもよいこととした。最後の鑑賞では、自分の作品の題名を考え、それを友だちには伏せておく。友達作品をみて、表現されているものが何かを想像し自分なりに、題名を考えるスタイルで活動した。

成果として、最初に鑑賞の授業をしたことで、児童が今後の活動に見通しがもて、鑑賞する際の視点が明瞭になった。また、形や色で自分なりの表現をすることができた。さらに、友達作品をその形やイメージから推測することができたという点も成果として挙げられる。

課題として、友達がどんな想いをもって製作したかまで、考えを深められなかったという点が挙げられる。

2 参加者から

- ・児童の作品がどれも力強く、のびのびとしていて、圧倒された。コラージュする際、形を切り抜くときの指導方法を教えてほしい。また、その時、示範をしたのかどうかお聞きしたい。
- イメージができていない児童には、そのイメージに近づく形を切るよう指導した。イメージが固まっていない児童には、思いのまま切った形から発想させて、切るよう指導した。また、参考作品を見かえしたり、切り方の示範をしたりした。
- ・とてもおもしろい取組で、自分も真似してみたい。2点質問がある。①5年生で新しく習うべき



多くの技法があるが、その中でフィンガーペインティングにした理由にした理由について知りたい。②元永定正の作品には、意図的にナンバリングしたのかについてである。

→①イメージの世界を表現させたかったため、自分のイメージに近い物が「フィンガーペインティング」で表現できると思い、表現方法を限定させた。手を使うことで、指先で細い線を描いたり、指ではじいて点をつけたり、手のひらで広い面積をぬるなど、様々な表現ができるところに着目した。

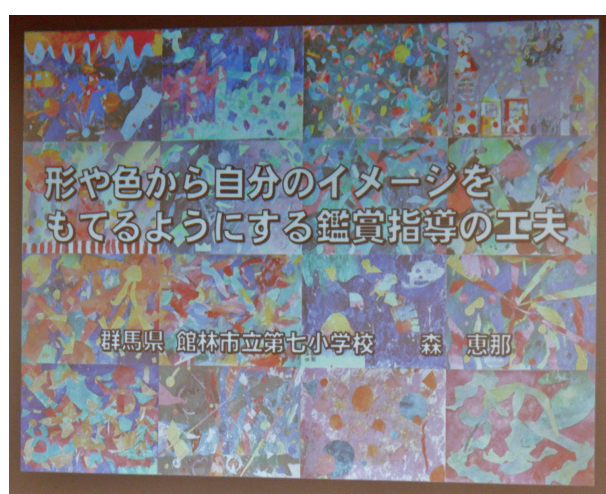
②故意にナンバリングした。番号をふることで、作品全体を鑑賞したあと、個々の形や色に視点をうつし、表現しているものを考えさせたかった。

3 助言者から

題材構想に二つの工夫がある。一つ目は、通常考えられる鑑賞の授業である「表現→鑑賞」の流れに、ひと工夫し「鑑賞→表現→鑑賞」の流れにしたことである。はじめに教師の作品や作家の作品を見せ、「見方、感じ方」を全体で共有する（インプット）。そこで得た見方や考え方を働かせて、自分なりに表現に取り入れることで、造形的な能力の育成につながっている（アウトプット）。そして、最後に「対話型鑑賞」活動として、「この絵の中に何が起きているか？」などを問い、考えさせることを通して、自分なりのイメージにつなげることができていた（インプットとアウトプット）。

二つ目は、抽象的表現にこだわったところである。ともすると大人は、抽象的表現に対し、難しいなど、苦手意識をもつことが多い。ところが、小学生は、素直に形や色を見ることができ、実は大人が感じるような難しさを感じていない。抽象的な表現をするために、学習し、トレーニングすることは必要であるが、本提案発表では、表現と一体化した鑑賞指導としての工夫が見られた。

以上の2点の工夫から、森先生の授業は、「形や色から自分のイメージをもてるようにする鑑賞指導」を成功に導いたと言える。



分科会5（A表現）— a 茨城県 中学校

素材とかかわり 社会とつながる造形

- 提案者 細谷 剛（水戸市立国田義務教育学校）
- 助言者 角谷 直人（水戸市立双葉台小学校校長）
- 司会者 村井 悟（水戸市立常澄中学校）
- 記録者 堀江 昌代（水戸市立双葉台小学校）

1 提案者から

（水戸市国田義務教育学校の全校写真提示からのプレゼン）

- ・地域にある優れたデザインを題材に取り上げ、社会とのつながりを意識した。特に、子どもの学びのエネルギーが持続できるよう題材の導入部分を工夫した。
- ・「地域の学習資源を生かして、デザインの力について考えさせる授業展開の工夫」とした。
- ・題材は、漢字一文字と文字からイメージした絵を見る人に楽しく伝わるよう構成する「絵文字」。少しでも見る人に親しみやすく「モジエもん」と名付けた。
- ・ラフスケッチ、アイデアスケッチをスモールステップで進める。
- ・技術の習得よりも書体の機能性について考えることに力を入れる。
- ・アマゾンとフェデックスのロゴマークを見せ、マークに隠された作者の工夫を感じ取らせた。地域の特産物と駅名の文字の形を基にしてデザイン、意味を考えた。
- ・素材袋を渡し、無作為に駅名標のアイデアスケッチをする。
- ・始発から順々に発表。プロの作品の意図を探しやすくなった。「デザインの力」が大きく貢献していること、街や人を幸せにすることもできる。自分達が自ら考えることによって、作者の思いに寄り添うことができる。



2 参加者から

- ・千葉の小佐原さんのデザイン、実際に地域を発信するプロジェクトである。ひたちなか市の湊線、阿字ヶ浦の地域発信を兼ねているのが素晴らしい。地域に目を向けたところが素晴らしい。授業者の思いが感じられる。（前橋市）
- ・平磯駅の「だいちゃんクジラ」の作家のデザインと生徒のデザインの類似性が楽しい。（茨城県）生徒は写真・漢字資料を参考にして、工夫して作っている。「平」の字のバランスもおもしろい。
- ・地域の資料を使っておもしろい。2時間目でグループ製作も素晴らしいが、その後が繋がらないのがなぜなのか。（東京都調布市立三中）
- ・どうしたらやる気を起こさせるか、駅標に出会ったことから始まった。（A）
- ・地域の学習資源を生かして、デザインの力について考えさせることを大切にしたい。（A）
- ・スカイツリーなどマスコットキャラクターを共感することが多い。（東京都）
- ・その後の掲示等があったら教えてください。（東京都）
- ・文字のデザインのステップとして割り切ってみた。（A）

- ・自分で納得できるものを作ってほしいということを前面に出した。掲示は、これから校内で行う。(A)
- ・地域と結びつくのがすばらしい。(前橋市)
漢字をデザインによって、地域の人々の心も名詞、動詞等提示の仕方の違いは？(A)
- ・1分考えてできなかつたら、次の方へいきなさいとアドバイスした。(A)
- ・製作のイメージを広げられるようにしていった。(A)
- ・名詞とか動詞とかという違いからではなく、題材を取り扱った。
- ・すてきなご指導であった。自分達の作ったものと、作家の作ったものを地域のものを最後まで使って題材につなげていくとよいのでは？(東京都)
- ・デザイン自体は、地域をうまく発信していくプロジェクト。子どもたちは幸せだなあ。(東京都)
こういうデザイナーに出会えるだけでもすてきだ。紹介していただきありがとうございます。(前橋市)

3 助言者から

- ・地域の学習資源を生かしたデザイン教材の力を指し示す、地域素材の教材化していく意義のあるものである。茨城県は「魅力度最下位」だが、夏場は人であふれロッキンジャパンがあり、人が殺到する。ネモフィラで有名なひたちなか海浜公園がある。そこに、一本の黒字経営のローカル線がある。マスコミが殺到している。一つに「中根」駅標がある。古墳の意味が隠れている。見た人が立ち止まりなるほどと思う。教科書にあるもの・素材・作品を大事にしたい。教科書で学ぶ。造形活動を通してどんな力を付けるか。教科書の授業に、日常の授業をするよさがある。現在、若手教員・ベテラン教員もいて真ん中の教員がいない。美術教員も足りない状況。日常の授業の質を高めていくのが大きなテーマである。これは関ブロのテーマでもある。カリキュラムマネジメントの視点があることがこの授業の大事なところである。9年間の中で、なぜ中1でやるのかを見通している。デザインが人を幸せにし、豊かにすることを伝える授業である。ラフスケッチから、もう既に子どもたちは満足しているのではないか。地域に貢献している。地域だからこそ実感がある。この題材が今の実情に合う日常の授業を高めていくのに、実はたくさんの魅力が詰まっている。
- ・新学習指導要領にあって、学びに向かうエネルギーが教科書にあるような作品だからこそ、美術の授業を提案する価値を見直す。日常の授業をカリキュラムマネジメントする。この題材を何が身に付けてどんな力を付けていくか。新指導要領にあっては、出会いがあって、学びのエネルギーが生まれる。書体の機能等に出会わせ、経験し、意図が伝わる絵文字が作りたいと表現活動に入る。相手意識がある。地域のデザインに貢献するデザイナー「デザインの力」で人は拍手する。
- ・地域のデザインをレタリングするよさ。デザインの力で人を変えていく。デザインで人を幸せにする。駅のねこ「おさむくん」を駅標に入れるデザイナーの気持ちを受け止めてデザインを鑑賞する、見え方が違う。伝える・対話する・使うバランスに優れた美術の授業。「実感」を伴う機能はよさにつながり、美術文化の「機能」となる。デザイン・形を自己決定し、他者を理解することに合わせていく美術は素敵な教科である。まさに、魅力がいっぱいな授業の提案であった。
- ・那珂湊線がつながる。義務教育学校ができる生活の線路ができる。魅力がいっぱいの茨城県である。ここからつながる美術がまた生まれたらすてきだ。

分科会5（A表現）—b 東京都 中学校

素材と関わり社会とつながる造形「色と光の生命体」

～ディップアートの可能性を楽しもう～

- 提案者 平岡 紀子（江戸川区立鹿骨中学校）
- 助言者 大瀬 義一（調布市立第三中学校校長）
- 司会者 橘川 小夜（小金井市立小金井第二中学校）
- 記録者 濱 夏子（墨田区立錦糸中学校）

1 提案者から

本題材は、3時間でディップアートの素材に触れ、制作する中で「生命体」を感じながら形を作り出し、できた作品をグループで組み合わせながら写真撮影を行っていく取組である。授業では、創造することの楽しさを味わいながら「思考力」「判断力」「表現力」を働かせ、「造形的な創造活動の基礎的な力」を獲得させていくことを目指した。また、制作したり、写真撮影したりする中



で、色や光を感じながら、それがスタンドグラスや夕日の光など、生活の中にある美術の働きや豊かな文化芸術との出会いにも触れて、創造のエネルギーを培い、学びへ向かう力へとつなげた。

大会テーマとの関連として、1「素材と出会い」、2「光との関わり」、3「仲間の作品とつながる」、これらの造形活動を通して、その経験そのものを社会とのつながりを感じる体験となっている。以下、それぞれについて述べる。

第1に、素材の出会いについて、ディップアートの扱い方のデモンストレーションをした。針金で形を作ったものを、ディップ液に浸して透明または半透明な膜にして、乾燥させることで作品のパーツができる。この場面で気をつけることとして、3つ挙げた。一つ目に、ディップアートの本来の用途を伝えない（ディップアートはアメリカンフラワーとも呼ばれ、手芸用品店で、アクセサリ作りや、オブジェ制作で使われていたが、そのようなことは一切伝えない）、二つ目に、思考からイメージできる投げかけや提示（今回は「生命体」というテーマを設定している）、三つ目に、作りながら考えをまとめていくことである。あえて、構想の時間を設けず、作りながら試行錯誤させていくことで、素材そのものを楽しむ雰囲気や、「生命体」を自分の中から生み出す楽しさを引き出していった。

第2に、光との関わりや、新しい素材の出会いを共有することである。授業の中に折に触れながら、西洋美術での、スタンドグラスや、日本のガラス工芸など、先人たちの豊かな文化に触れ、学びに向かう力のひとつにした。

第3に、仲間の作品とつながることである。個で制作した作品が、他者とつながることで、造形的な視点が、新たな見方へと変化した。『あなたの命の形が、仲間と共存していく世界へと、グループで作り上げよう』と呼びかけ、光の効果を生かしながら取り組む写真表現への挑戦へと発展させた。このグループ活動では、写真撮影の中で、ディレクターや照明、スタイリストなど役割を

分担することで、角度やアングル、照明の当て方、再構成の工夫など、「生命体」の世界を生み出し、良さを発見していった。

本題材の成果として、短時間題材であっても、素材の可能性や魅力を提示していくことで、その生徒は美しさを味わい、作り出す活動そのものを楽しむことができていた。「また、構想が苦手だったが作りながら考えると、どんどんアイデアが浮かんできた」という生徒もいた。

一方、課題として、つくる行為が目的ではなく、学びとして何が残るかが重要であると考えた。活動の中で、教師が生徒の学びをどこで見取り、学びが深まったかを見つめる力が求められる。造形的な見方・考え方を働かせるには、造形的視点を基に、どのような考え方で思考するかが大切である。

2 参加者から

- ・ディップアートそのものや、周辺の素材に関する質問が多く寄せられた。ディップアートを展示する土台となるフラワーベースの色の豊富さに驚いたとの声があった。生徒が制作する際の制約があるかどうか、混色の不可など、素材そのものに対する関心が非常に高く感じられた。
- ・「生命体」を題材にしたことで、子供たちに命あるものに設定したことで気をつけたことがあるかという質問があった。それに対して提案者は、「生命体」を幅広い意味で捉え、抽象的な「命の形」であったり、「未知との遭遇」のような宇宙人的な意味であったりと、様々な方向性で考えて良いと投げかけているため、その形は多種多様であったと解答している。
- ・ディップアートでアクセサリーを作ったことのある参加者から、ディップアートそのものの耐久性や、屋外展示に耐えうるかという質問があった。それに対して、提案者は、保存性はあり、ある教育大会を機に展示したディップアートは半年ほどでも破損はなかったと答えている。また、都内の工芸高校の文化祭の展示でも使用されていたことをあげ、上級学校でも使用されている素材であることを伝えた。しかし、屋外展示は行ったことはないとのことだった。
- ・発表後、参加者から、ディップアートの実際のものや、針金に触れる時間があり、多くの参加者が素材にふれながら、提案者と参加者の間で有意義な情報交換の場となった。

3 助言者から

東京都での、都立高校での実技教科の成績の扱いについて説明があった。内申点の配点によって、生徒は、実技教科の評価を気にしている傾向が強いとのことだった。それゆえ、発想が追いつかない子をケアしたり、言語活動で手助けしたり、美術の授業の中で作品制作に入る前に、下準備が多いことを挙げた。

今回の授業では、生徒は構想がなく、試行錯誤しながら形を作っていくことがポイントであるとの説明があった。構想・アイデアスケッチなどの設計図がなく、素材の感触や、試行錯誤を重ねることで発見や、創造力を育てることが目的であり、短時間で生徒の取り組み方、造形的な見方が変わったことが大きいとの助言をいただいた。

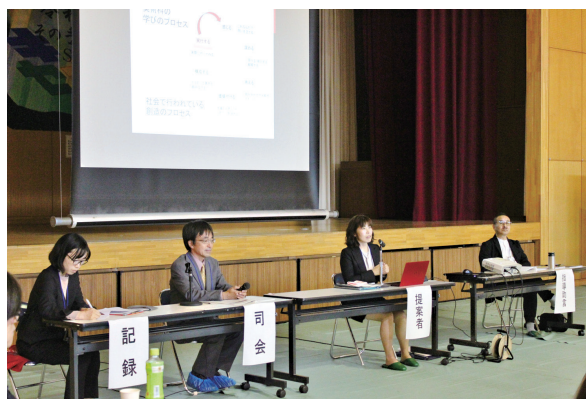


「美術科の学びのプロセス」を視点にした単元の再構成 ～「文様」を素材とした実践を通して～

- 提案者 河合 恵（沼田市立沼田中学校）
- 助言者 茂木 一司（群馬大学教育学部教授）
- 司会者 飯塚 淑光（藤岡市立北中学校）
- 記録者 山田 典子（東吾妻町立原町小学校）

1 提案者から

美術科で何を学ぶのかを考えるきっかけになったことがあった。中学3年生から言われた「美術ができたらか何か良いことがあるのか。」という一言である。その言葉を聞いて、美術科でも他の教科と同じように身に付けるべき能力を具体的に伝える必要があると感じ、神野真吾氏の「アートの思考」を参考に美術科の学びのプロセスを考え、美術の学習で活用している。そのプロセスとは、感じる→深める→考える→価値づける→構成する→実行する、そしてもう一度はじめに戻るという輪になっているものである。さらに、生徒自身が意識して学習するために毎時間めあてを提示し、授業の最後には振り返りを行っている。



また、「素材とかかわり社会とつながる造形」というテーマについては、素材とかかわることは、身の回りの美しいものに気付くことのできる感性や視点であると捉えた。そして、社会とつながることは、身の回りの美しいものに気付くことのできる感性・視点と、美術科で行われる「学びのプロセス」によって学び得た資質・能力、つまり、「どのような視点で物事を捉え、どのような考え方で思考していくのか」ということを生徒自身が意識して学習を積み上げることにより、社会への接続をしていくことと捉えた。

今回の実践である1年の文様の学習で最初に行ったのは、「感じる」プロセス（これなんだ？問いを立てる）である。振り返りカードから、生徒が身近な文様を鑑賞する学習を通して、身の回りの文様を見つける能力を身に付けることができたことが分かった。

次の「深める」（調べる・観察する）では、文様の構成を考え、規則性や余白の美しさに気付くことができた。「考える」（組み合わせのイメージ）「価値づける」（これだ！を決める）では、毎時間ワークシートに多様なアイデアを描き、どのアイデアを採用するかを考えて行く様子がわかる。このように、生徒の振り返りカードやワークシート、生活ノートから何を学び、気付いたのかを見取ることができる。

「構成する」「実行する」では、構成やモチーフを考えながら版を作り、手ぬぐいに押し、作品を完成させた。そのプロセスを経て、再び「感じる」プロセスに戻ってくる。今度は作品の鑑賞である。ティッシュケースを包むなど、作った作品を実際に使ってみる学習は「深める」プロセスである。この学習を通して、生徒自身が学びのプロセスを意識して、学習していくことができた。

さらに、入学から卒業までを意識して学習するために1年の最初に「美術で何を学ぶか」、3年の最後に「美術で何を学ぶことができたか」を書く活動をしている。3年生の記述では、「発想力・想像力を学んだ。」「他者との交流の楽しさを学ぶことができた」などの意見を書いている生徒がいた。美術で学んだことを意識できている生徒が多かった。

課題は3年間の学びを常に意識できるようにすることである。英語科では「CAN-DOリスト」という、何をどのような活動を通して学ぶのかを示したリストを使用しているので、美術科でも同じようなリストを使用したいと考えている。

2 参加者から

・ゴム版というのは加工がしやすくとても良い素材であると思う。ゴム版の大きさとゴム版に色をつける材料が知りたい。

消しゴムはんこ用のゴム版を名刺サイズに切って一人一人に配布した。色をつける材料としては、布用スタンプはすぐに乾燥してしまい、不便だったため、布用絵の具を使用した。混色も可能で便利だった。

・手ぬぐいの文様を考えるという題材だったが、生徒に示した「日本らしい柄」とはどのようなものと位置づけたのか。

昔から在る文様をいくつか提示したところ、それをヒントに生徒自身が日本らしいものを感じて、考えられていた。

・めあてと振り返りを毎時間するのは理想ではあるが、時間がかかるのではないか。実際にはどのくらいの時間を要するのかが知りたい。また、どの題材でも毎行っているのか。

毎時間振り返りを行うが、文章による記述ではなく、○をつけるだけの時もあり、あまり時間はかからない。すべての題材でめあての提示と振り返りの記入をしている。

・日本らしい文様として、手ぬぐいに押すときには色数の制限はしたのか。

学習の中で生徒自身が色数の少ない方が美しいと気付いたこともあり、2色または3色という制限にした。

3 助言者から

生徒に全部のプロセスを説明してから学習に入るとするのは、カリキュラムマネジメントをしているということ。しかしそこから外れた生徒もいるかもしれない。その生徒をどう支援するかを考える必要があるのではないか。

また、毎時間の振り返りカードには、美術の授業で教師が求めていることを生徒が感じ取り、それを書いている場合もあり、そこに現れる気づきや学びが全てではないかもしれないし、必ずしも本当の気づきや学びが現れていないかもしれない。教師は振り返りカードの記述だけでなく、目に見えない所での生徒からの発信を感じることも忘れないで欲しい。

今回の分科会では、デザインが多く取り上げられていたが、新しい素材との出会いは生徒にとって重要である。中学1年生という年齢では手ぬぐいの文様はなじみがないであろうから、そういうものと出会い、日本らしさを学ぶことにはとても意義があるのではないか。

分科会6（B鑑賞）— a 千葉県 中学校

見方や感じ方を広げ，深める鑑賞

- 提案者 古川 明海（千葉市立土気南中学校）
- 助言者 若海 唯賀（千葉市立弁天小学校校長）
- 司会者 阿部 真紀（千葉市立緑町中学校）
- 記録者 岩坪 朝子（千葉市立轟町中学校）

1 提案者から

- (1) 千葉市立土気中学校での鑑賞の取組について
 - ・週1から1.5時間の美術の授業で，時間を確保し，自分達の作品の制作前後に行われる相互鑑賞や参考作品の鑑賞，作家の作品の鑑賞授業を行っている。
 - ・作家の作品の鑑賞題材は1年「ゲルニカ」，2年「海の男」，3年「二枚の絵」（本題材）。三年間を通して作家の作品鑑賞を取り入れることで，中学校卒業後も生涯にわたって鑑賞を楽しむことのできる資質や能力を育てていきたい。
- (2) 「二枚の絵」について
 - ・扱う作品は「The Wave」（ギュスターブ・クールベ 1869 フランス）と，「神奈川沖浪裏」（葛飾北斎 1831 日本）。
 - ・同時代に描かれた「波」をテーマにした作品を比較鑑賞し，表現の共通点や相違点を考えることをきっかけとして自国や諸外国の美術や文化に対する見方や感じ方を深めさせたい。
 - ・二時間扱いの二時間目には，浮世絵が世界に与えた影響を扱い，自国の伝統や文化に誇りをもって，互いに尊重し合う態度を培うことを目指したい。
- (3) 指導の工夫
 - ・比較鑑賞して共通点と相違点を考える時に，「対象」「構図」「色」の3つの視点に絞って考えさせた。
 - ・グループの発表を聞く時に，ワークシートに気付いたことを記入させる。「なるほど」（自分の気付かなかった見方考え方）と思ったことは赤で，「いただき」（自分の見方や考え方より良いと思ったもの）は青で記入させる。
 - ・発表の形態として，個人で考え，グループ内で話し合い，学級でグループごとに発表，と自分の考えを持ちながら，徐々に広げ，深めていくことができる。
 - ・グループごとの発表では，効率よく進められるよう，あらかじめグループでの話し合いの時に，ホワイトシートに意見を描かせるようにした。発表と黒板にシートを貼る役割を分担し，発表と同時に分かりやすく提示できるようにした。
- (4) 授業の様子
意見を活発に発表し合う授業の様子を動画で紹介した。
- (5) 浮世絵について生徒が気付いたこと



- ・線描による表現であり，平面的な作品である。
- ・余分なものを切り捨てた明快な画面である。
- ・鮮やかな色彩が用いられている。
- ・左右非対称である。
- ・前景と背景を対比させ，そのものの大きさを表現している（対比遠近法）。

(6) 授業後の自己評価

- ・自分の考えを積極的に発表できた。 87%
- ・他の人の意見を真剣に聞くことができた。 100%
- ・西洋の絵画や浮世絵の特徴を考えることができた。 100%
- ・浮世絵に興味をもつことができた 98%

(7) 成果

- ・自分の見方が広がり，表現の多様性への理解が深まった。
- ・自国の伝統や文化に誇りをもつことができた。
- ・鑑賞が表現活動への意欲につながった。

(8) 課題

- ・豊かな情操や表現力につなげていけるような題材開発をすること。
- ・普段の学習の中での意見交換を大切にし，自由に意見を発表したり言い合ったりできる環境づくりをすること。



2 参加者から

同じ比較鑑賞の授業を「ダビデ像」と「金剛力士像」で行っている。それぞれ別の授業で扱うより，1時間で2時間分の鑑賞学習ができ，様々な表現方法や素材を学べるので，比較鑑賞授業は効果的である。子ども達は，個々に経験が違うので，教員の提示でその子の表現を広げていくことは大事である。

(前橋市立みずき中学校 田中先生)

3 助言者から

比較鑑賞がよく生かされた授業である。二つの作品の造形の違いが認識しやすく，興味を喚起させる。鑑賞の手立てとして，三つの視点を与えて取り組みやすくしている。よく見ていくうちに，造形性に気付くことができる。授業での子ども達の嬉々とした様子が印象的な授業だった。子ども達は発表のマナーが身につけており，人の意見に興味をもって聞いていた。発見したことを皆で共有し合うことで達成感が味わえ，日本の文化を深く知ることができている。この授業は子ども達の心の中の引き出しを広げ，今後の制作活動につなげていくことができるだろう。

千葉県は菱川師宣出身の地であり，鋸南町には，美術館がある。また，千葉市美術館は浮世絵の収集に力を入れており，多くの作品が収蔵されている。浮世絵を勉強するのに適した環境である。

分科会6（B鑑賞）—b 神奈川県 中学校

題材名 「ゲルニカは語る」

- 提案者 美濃谷 学（綾瀬市立城山中学校）
- 助言者 天形 健（元福島大学人間発達文化学類教授）
- 司会者 規工川奈実子（綾瀬市立北の台中学校）
- 記録者 東原 加奈（大和市立南林間中学校）

1 提案者から

20世紀を代表する作品「ゲルニカ」を題材に取り上げ、実物大のレプリカを参考作品として鑑賞の授業を行った。作品を見て造形的な要素に美しさを感じたり、作品が作られた背景を知って考えたり、作者に想いを馳せたりして、自らの視点で新たな解釈や価値観が形成されることを狙った題材設定である。

作品の鑑賞の経験が乏しく、その面白さに気付かない生徒が多いと感じている。まずは作品を身近に感じさせるための導入を工夫した。そして、生徒の興味関心を引き出す効果的な指導を授業展開の中で探りながら、実践的な授業研究を行った。「ゲルニカ」は、生徒も一度はどこかで目にしたことのある作品である。作品を見ただけでタイトルや作者名を答えられる生徒も少なくはない。しかし、実物の大きさを知らなかったり、じっくりと鑑賞したことがなかったりする生徒は意外に多いということも事実である。

今回の「ゲルニカ」の鑑賞では、まず、実物大の大きさを体感させ生徒の興味関心を引き出した。そして、「ゲルニカ」から感じる音や色に視点を向けさせる発問を作品に深く入り込ませるきっかけとした。その後、ピカソ自身についての半生と、「ゲルニカ」の制作背景についての情報を映像資料で提示し、改めて「ゲルニカ」について感じたことや考えたこと、映像資料を見る前と後での感じ方の違いなどについて話し合い、各自がワークシートにまとめるという学習活動を展開した。

「ゲルニカ」に対しての生徒の関心は高く、級友たちと意見を交わす姿が普段よりも多く見られた。また、「本物を見てみたい」という声も多く、充実した学習活動を演出することができた。「もう二度とこんな戦争はやめてほしいと伝えたかった」「ゲルニカの人々の気持ちを伝えたかった」という作者の心情や、「キュビズムの画風で、あらゆる方向から人々の苦しみを想像して描いたのだと思った」「暗い世界を表現し、『戦争はつらい現場だ』ということの色で伝えたかったのではないか」という作者の表現意図や工夫などを深く読み取ることができる生徒の姿は、新たな発見であった。そして、「自分と同じことを感じた友人や、全く別なことを感じている友人もいた」という感想も多く、「答えのないものを解析するのは難しいけど、人それぞれでいいんだなあとと思った」「自分では考えもしなかったことが出てきて、すごくおもしろい」など、友人の異なる感じ方や考え方を認め、受け入れる姿勢も見られ、それぞれの価値意識をもって話し合い活動を行うことができたと考えている。

一方で、ワークシートの項目が多く、生徒は書くことに忙しくなってしまった。作品とじっくり



向き合ったり，友人と語り合ったりする時間に学習の軸足を置く必要があると思われる。今後，ワークシートの簡略化と項目の精選が課題である。今回は，グループで活動のために作業机を囲む座席としたが，グループ座席のフリースペースでの可能性など，生徒の交流や情報入手の視点から学習活動の場の設定について再考する必要があると考えている。

2 参加者から

- ・群馬県伊勢崎市立境北中学校 堀内先生より

実物大のゲルニカの参考作品は先生本人が拡大して作ったのか？実際に拡大してつくったのならば画像をどのように用意し作ったのか？

→資料集を拡大してつくった。校内研修として行ったので，実物大になるにはどのように拡大したら良いのか，引き伸ばし方などを，技術科や他教科の先生から教えてもらって作った。段ボールに貼り合わせ，天井にフックをつけてハトメで穴を空けて吊るす形で展示した。

- ・群馬県桐生市立新里中学校 三宅先生より

このような実物大の作品の鑑賞は生徒にとって一生の思い出になると思った。自分が実際に「ゲルニカ」の授業をやった時は6人くらいの班で行い，グループの少人数でお互いが話し合い意見を共有・交流した。言葉だけでは悲惨だといえるが，本当の戦争の苦しみはどうか，作品を通してその辺りを深めていくにはどうしたら良いのか？「ゲルニカ」を鑑賞して，最終的に戦争は悲惨だった，など表面的に終わってしまうところがあると思うが，その一歩先の鑑賞の授業はどのようなものなのか？

→戦争というテーマを伝えることも大切だが，そのためにも子どもたちにどのような力を付けさせたいかが基本的に重要になる。ゲルニカそのものに対しての知識を与えて深めようということよりも，この作品を鑑賞することでそのような力が付いていくか，子どもたちの中で興味関心をもって，調べたい人は調べてほしいし，実際に見てみたいと思う人は見てほしいと思う。

3 助言者から

- ・導入時に実寸大の作品をしばらく鑑賞する時間を設定した。生徒が自ら集まってきて鑑賞を始めた。やがて，作品の前で2～3人のグループの自然な会話が始まった。作品の前に集まった。この時間を持つ意味がそこにあり，生徒が交互に作品の印象を語り合う対話型鑑賞へと誘っていった。
- ・コピーの貼り合わせとはいえ，鑑賞のための作品としてこれだけ大きなものは作れない。実物と比べるとディテールは異なるが，実際に本物を見に行っても近くまで接近できるわけでもない。実寸大から受ける作者と作品の関係がライブ感覚で得られるところに実寸大作品の価値がある。ピカソが見上げながら描いた情景やタッチやストロークが伝わってくるのである。
- ・牛の頭の大きさやぼかしているところなど，描画時の大きさが感じられ，ピカソが制作していた時のような状態で生徒は作品を見ることができたであろう。
- ・鑑賞をするということは私たちにとって「選ぶ」という表現行為の一つでもある。鑑賞活動に興味を抱かせ，作品への関心が生じれば，鑑賞活動を通して，主題性，時代性などの文化理解が深まるともに，個々に洞察力や分析力，コミュニケーション能力等が高まることを実践的に示してくれた授業である。

分科会6（B鑑賞）—c 群馬県 中学校

美術館と連携した鑑賞活動の工夫

～主体的・対話的で深い学びの授業を目指して～

- 提案者 國枝 里江（桐生市立中央中学校）
- 助言者 市川 寛也（群馬大学教育学部准教授）
- 司会者 茂木 克浩（みどり市立笠懸南中学校）
- 記録者 小田島 彩（みどり市立大間々東中学校）

1 提案者から

本授業は、桐生市立中央中学校の1年生を対象とした授業です。

テーマである「素材とかかわり 社会とつながる造形」との関係について、「素材とかかわり」は地域の素材を使うワークショップを、そして「社会とつながる造形」は、学芸員や美術館との関わり、また生徒自身の生活体験や世の中の出来事を通じた造形活動と考えました。

取り組みとしては、地域にある大川美術館との連携を行いました。生徒は、小学校の頃から大川美術館との関わりがあり、夏休みに大川美術館へ行き、鑑賞を行うという宿題もしています。「主体的・対話的で深い学び」の授業の工夫として、題材に関しては具象作品で分かりやすいもので要素が多く、幅広く捉えやすい作品として、松本俊介の『街』を選んだ。また言語活動では、グループ活動で形や色着目させ、自分の解釈に根拠を持たせるようにしました。教師はファシリテーターの役割で活動しました。鑑賞の仕方としては、まず全体で着目して観ます。生徒は、形や色彩から物語を想像し、生活体験や、世の中の出来事とつなげて考えました。描かれた年代から、戦争とつなげて考える生徒もいました。その後グループで観て、それぞれの見方を交流させます。そして、学芸員さんによる絵の見方の説明を行います。その時は、同じ松本俊介の『婦人像A』をもとに紹介しました。内容としては、作家の生い立ちや、時代背景、作品の共通点などです。振り返りでは、活動を通して感じたことや考えたことをまとめました。観る人によって感じ方が変わったことが面白いということや、学芸員のレクチャー効果によって、作品の感じ方が広がったことに気づいた生徒がいました。

ワークショップでは、「松本俊介の『街』の色の素材を集めて、コラージュで自分の街を表そう」という活動を行った。織物が有名な町なので、地元企業の協力で、布や着物のはぎれ、糸、紋紙、レースを譲ってもらい、それを使って自分の街を表現しました。

【成果】としては、今回の鑑賞の授業を通して、生徒は全体のイメージを感じ取るだけでなく、生活体験などを基に、自分なりに想像して観ることができていました。また、見方を交流させることにより、新たな視点で作品を観て、見方や感じ方を広げることができました。

【課題】としては、ワークシートの発問だけでは、作者の心情について深く考えさせることがで



きなかったので、交流の場面で投げかけるなどの工夫をしていきたいです。今回は独立した鑑賞活動であったが、表現と合わせた活動も美術館と連携して考えられるとよいと思いました。

参加者の方々には、各地域で美術館や企業、個人など、どのような所とどのように連携したり、協力をしてもらったりしているか、実践例などを教えていただきたいです。

2 参会者から

神奈川県 学芸員に授業に登場してもらい授業をするというのは、生徒達に貴重な体験をさせており、とても良いと思います。実践例に関しては、学芸員が授業に登場するということはありませんが、横浜では先生達の研究会の中で、市が持っているコレクションをどのように使えるかという研究をしています。

群馬県 二重三重に仕組まれた授業で、とても参考になりました。同じく美術館に行かせるにしても、このような授業のあとだと、生徒たちの感じ方が違うのではないのでしょうか。同じ授業を3年間でするとしたら、1年生で鑑賞をして、2年生でその知識を生かしていけると良いと思います。我々は美術の力をつけたいと思っていますが、最終的には美術に親しむということが大切なことなので、中学生のうちから親しんでいくということが大事だと思います。地域との連携では、和菓子を作るとき、和菓子職人さんと呼んで教えてもらうなどしています。県の近代美術館に作品を借りるなどもしています。

3 助言者から

学区内に美術館があるという、めぐまれた環境の中で、美術館との連携や学芸員の授業派遣など、有効的な取り組みを行っています。そういった環境をもっている地域の美術科の教諭が参考にできると良いと思います。学芸員を招いて、専門的な知識や観点をを行っています。学芸員さんとの調整や連絡はどれくらい行ったのでしょうか。→【提案者】一度だけ美術館へ行き、略案をもって相談を行いました。あとは、3クラスの授業をやっていく中で、課題点を見つけ、授業を通して調整をしていきました。

今回の実践は「つなぐ」ということで、「学校」と「地域」をつなぐ、そして「鑑賞」と「表現」をつなぐコーディネーターとして、先生の役割があったと思います。美術は、他教科と比べ、社会とつながりやすい教科だと思うので、先生がそういった存在として後押ししてあげることが出来ていたと思います。これからも実践を積み重ねていく中で、取組をよりよくしていけると良いと思います。



分科会7（表現）— a 群馬県 高等学校

明日への『想い』につながるデザイン

- 提案者 佐藤 卓（群馬県立前橋東高等学校）
- 助言者 島田 聡（群馬県教育委員会指導主事）
- 司会者 渡邊 俊介（群馬県立大間々高等学校）
- 記録者 小池 雅之（群馬県立渋川青翠高等学校）

1 提案者から

高等学校の校種別テーマ「社会とかかわり明日につながる造形」を受け、分科会のタイトルを「明日への『想い』につながるデザイン」として、「ご当地ナンバーのデザイン」を題材とした授業を行った。

美術科の表現活動で、特にデザインは社会の発展にかかわる創造的な役割を果たしており、心豊かに日常の生活を送っていくためには必要不可欠であると考え

る。将来的に専門分野を目指すわけではないにしても、その基本的な知識や技能を身に付けることは大切である。デザインは、ちょっとした工夫やアイデアを生み出す感性や発想力へとつながっていくものであると考え、社会や日常生活の中のあらゆる部分でデザインが関係しているということを、授業の中で生徒に説明している。

授業においてデザインや美術分野全般を、どのようにして社会に結び付けていくかが難しい。そこで、よい作品ができたということより、取組自体に意味をもたせたいと考え、伊勢崎市のご当地ナンバーを制作するという課題を考えた。この課題については以前に伊勢崎市でご当地ナンバー制作の構想はあったが見送られた経緯があり、授業で生徒たちに取り組みせたいと考えていた。群馬県の人々からも注目されるという期待感もあり、生徒にもそれらを伝えながら制作に取り組みさせた。この次のステップとしては、実際にある企業や施設、店舗等で提案できるような企画にも携わる活動に発展させていきたいと考えている。

今回の授業の前段階として、デザインの授業で色面構成を行い、分割面を色相で意識して塗る課題を制作した。同一色相または類似色相、対称色相か補色色相の2種類の課題を行い、次に立方体を描き、光の当たり具合で面の色味を変えて明度で塗り分けを行い、立体感を出すために彩度を押さえて制作させた。次の段階として今回のご当地ナンバーを制作させ、系統化でのつながりや基礎・基本を押さえた課題として実施した。今後の課題のつながりとしては、本校卒業生のデザイナーやディレクターと協力して活動したいと考えている。芸術活動を実践している卒業生と、交流の幅を広げて関係性をつくることにより、美術やアートでつながりのある題材が生み出されることを期待している。地域では、本校近隣のJA（農業協同組合）から本校生徒の作品展示の依頼があり、農作物を題材にしたポスターやチラシ作りも行っていきたいと考えている。



2 参加者から

- ・デザインに対して深く研究されている。生徒の作品を見ても、デザインに対して系統立てて取り組まれていることが分かる。コンセプトの発想から筆の使い方など、丁寧に細かく指導していた。授業者の言葉の重みと温かさに感嘆した。
- ・形式重視ではなく、内容重視でよかった。取り組み事態が意味をもっていた。学んだことをつなげていき、更に整合性があり系統立っている。基礎も押さえて授業を行っていた。表現する趣旨や目的も共有できており、作品レベルも高く感心した。
- ・テーマ「社会とかかわり明日につながる造形」から、学校教育の中でどのように社会と接続できるのか興味深く参観できた。本時では丁寧な色彩論に基づいた授業がなされており感心した。実際には効果をみようとしたとき、コンピュータを使って色彩を自由に変えて確認できる環境を整えば、色面を塗ることをせずにデザインの効果を確かめられると思う。そのことにより生徒は、色彩による視認性の高さや効果をより強く自覚できたであろうと思った。
- ・最初に伊勢崎市はどのような街のイメージなのか興味を湧かせることによって、新しい見方に結び付くと感じた。社会に広げていくのは難しいが、こうした観点で見て、新しい魅力を再認識することで発展していく可能性があると感じた。また課題後の生徒の感想や、今後の広がりにも興味が湧いた。

3 助言者から

第一に、本時の学びと新学習指導要領との関係について触れたい。指導案では、形の追加や削除、配色の変更を認めることで「途中からでも新たな発想や創意工夫が生まれるようにする」としている。本時では、よりコンセプトを際立たせるために変更を行うなどの「造形的な見方・考え方」を働かせている生徒の姿があった。対象を再度深く見つめたり、内面や本質を捉え直したりして、「本当に自分が表現したいものがこれで表現できるだろうか」「もっといい表現があるのではないか」と、再度自分に問いかけ、思考・判断を行うことは、教科・科目の本質に迫る重要な学びである。

第二に、大会初日における視学官の講演で、評価について「答えのない教科と捉えてもよいが、答えはある」との示唆をいただいた。これは、「芸術科の学びは、生徒が答えを作り、生徒それぞれに答えがある」と考えるとよいだろう。学びの過程の中で、生徒が答えを作っていく教科であるからこそ、私たち芸術科の教員は多様性を認め、観点別学習状況の評価を行って、生徒の学習状況を丁寧に見取ってきた。今後も、本時のように生徒が「見方・考え方」を働かせて思考・判断・表現できるような授業を継続して実践するとともに、評価方法などについて日常の見直しを行っていく必要がある。

以上、二点の内容を踏まえ、形の追加や削除、配色を変更した創意工夫の内容やその理由、生徒の思いを追記できるよう、ワークシートの工夫・改善を提案させていただきたい。

本日は、佐藤教諭の授業と前橋東高等学校の生徒の学びの姿を中心に、お集まりの多くの先生方が研究・研鑽することができた。特に、ご当地ナンバーのデザインについては、県内だけでなく日本全国で実践できる題材でもある。先生方には、全国的な視点ももちながら、芸術科教育・造形教育について、より一層の研究を進めていただければ幸いであると考えている。

令和元年度 関東甲信越静地区造形教育研究大会 群馬大会 実行委員会組織

<ul style="list-style-type: none"> ■大会実行委員長 吉崎 匠 (玉村町立玉村小学校) ■大会実行副委員長 丸橋 尊 (県立高崎北高等学校) ■大会実行副委員長 蜂須賀克明 (中之条町立中之条幼稚園) 	<ul style="list-style-type: none"> ■大会事務局局長 坪田 欣弥 (桐生市立川内小学校) ■大会事務局局長 瀧間 京子 (沼田市立多那中学校) ■大会事務局局長 後藤 章 (前橋市立おおこ幼稚園) ■大会事務局局長 間々田 博 (前橋市立原小学校) ■大会事務局局長 金井 幸光 (前橋市立相川中学校) ■大会事務局局長 高橋 浩明 (県立前橋東高等学校) ■大会事務局局長 藤田 秀孝 (県立高崎北高等学校) ■大会事務局局長 村田いつみ (東吾妻町立認定こども園さかうえ) ■大会事務局局長 天田 邦明 (前橋市立二ノ宮小学校) ■大会事務局局長 高野小百合 (前橋市立南橋中学校) ■大会事務局局長 豊岡 大画 (群馬大学附属小学校)
--	--

<ul style="list-style-type: none"> ■全体執行委員 群造美会長、小中学校代表、佐波郡代表理事 ■高等学校部会統括 ■幼稚園部会統括 	<ul style="list-style-type: none"> ■実行委員長・各部局との連絡調整、事務局サポート ■事務局長と連携、運営局長 ■会場校運営、主任会との連絡調整、研究局長 ■小会場校運営、主任会との連絡調整 ■中会場校運営、主任会との連絡調整 ■高会場校運営、主任会との連絡調整 ■高等学校部会の運営 ■幼稚園部会の運営 ■会場校や主任会との連絡調整 ■会場校や主任会との連絡調整 ■他県、市教委等関係機関との連絡調整、通知文、依頼文書等作成発送
---	--

<ul style="list-style-type: none"> ■局長 尚美 (群造美副会長、高崎市立鼻高小学校長) ■局員 <ul style="list-style-type: none"> ・坪田 欣弥 (大会事務局局長) ・金井 咲子 (群大附属小 群造美事務局会計) ・大井 衛 (群大付属中 群造美本部会計) ■主な業務 <ul style="list-style-type: none"> □渉外 <ul style="list-style-type: none"> ・旅行社の選定、連絡調整 (JTB) ・参加者名簿等の作成 (JTB) ・参加者数 (会場別、分科会別) の各局長へ報告 ・一般参加者の弁当等の準備、回転業者との連絡調整 ・会場校との連絡調整 ・名札、領収証、食券一式の準備 (JTB) ・大会役員講師等の昼食注文、配送依頼 ・群馬県、前橋市等観光案内等準備 □会計 <ul style="list-style-type: none"> ・予算案作成 ・予算配分 ・予算書作成、執行 ・参加費徴収 (旅行社との連絡調整) □基調提案 <ul style="list-style-type: none"> ・基調提案の作成、発表 □全体会議演習用機器全般準備 <ul style="list-style-type: none"> ・パソコン、プロジェクタ、コード類一式 	<ul style="list-style-type: none"> ■局長 内藤 武志 (群造美副会長、伊勢崎市立極東小学校長) ■局員 <ul style="list-style-type: none"> ・黒崎 高行 (群造美高崎市代表理事) ・清水 賢治 (群造美沼田市代表理事) ・竹内 昭典 (群造美館林市代表理事) ・横山みどり (群造美邑楽郡代表理事) ・久保 俊明 (群造美甘楽郡代表理事) □編集委員 <ul style="list-style-type: none"> ・町田美也子 (高崎市立東部小学校) ・山賀 真志 (高崎市立寺尾中学校) ・石倉 里紗 (伊勢崎市立境菜女小学校) ・飯塚 恵慈 (伊勢崎市立宮郷中学校) ・館原 志恵 (富岡市立富岡中学校) ・中村 敦子 (富岡市立富岡中学校) ・中村 聡美 (館林市立第九小学校) ・鎌田 崇人 (館林市立第二中学校) ・小久保多美子 (明和町立明和西小学校) ・瀧藤 紀江 (板倉町立板倉中学校) ・堀木 秀郎 (下仁田町立下仁田小学校) ・小林松恵子 (甘楽町立甘楽中学校) ■主な業務 <ul style="list-style-type: none"> □大会案内作成 <ul style="list-style-type: none"> ・1次案～最終案作成 ・最終案内配送 (各都県事務局宛、県内) □大会当日の記録 (写真・録音等) □大会当日冊子作成 <ul style="list-style-type: none"> ・提案者等への提案原稿依頼 ・掲載内容、書式等、体裁の決定 ・公開提案者指図書原稿依頼 ・印刷業者の選定決定 ・大会冊子の配布準備、印刷部数決定 ・編集作業 ・全体会、各会場校受付の配布部数割り振り ・アンケート用紙作成・集約 □大会報告書作成 <ul style="list-style-type: none"> ・掲載内容、書式等、体裁の決定 ・原稿締着依頼 ・印刷業者の選定決定 ・報告書配布計画作成、発送 ・編集作業
--	--

<ul style="list-style-type: none"> ■局長 尚美 (群造美副会長、高崎市立鼻高小学校長) ■局員 <ul style="list-style-type: none"> ・星野 孝 (群造美沼田市理事) ・岡田 和久 (群造美桐生理事) ・小林 澄子 (群造美渋川北群代表理事) ・栗原 博志 (群造美みどり市代表理事) ・尾藤 正一 (群造美吾妻郡代表理事) ・加藤 順子 (群造美利根郡代表理事) ・新井 幸弘 (藤岡多野代表理事) ・佐藤 明 (群造美佐波郡代表理事) ・神前 孝之 (群造美安中市代表理事) ・大平さつき (群造美太田市代表理事) ■主な業務 <ul style="list-style-type: none"> □全体会運営 <ul style="list-style-type: none"> ・全体会進行委の作成、進行 ・看板、演題等の作成 ・スナーズ設置準備 ・会場受付、駐車場…編集局を除く郡市評議員で分担 ・後藤 典子 (桐生市立相生小学校 来賓本部) ・柏瀬 薫世 (桐生市立広沢中学校 一般本部) ・川端 郁夫 (沼田市立白沢小学校 一般本部) ・南雲 優人 (沼田市立沼南中学校 一般本部) ・後藤 篤恩 (安中市立第二中学校 一般本部) ・井戸瑠理子 (安中市立福岡中央小学校 一般本部) ・金子 岳史 (みどり市市立大間々中学校 一般本部) ・濱田 大作 (中之条町立中之条中学校 一般本部) ・黒岩 泰之 (草津町立草津小学校 一般本部) ・小林 亮子 (中田市立生品中学校 一般本部) ・前原 悦子 (太田市立昭和中学校 一般本部) ・小尾 英樹 (昭和村立昭和中学校 一般本部) ・野飯 洋平 (渋川市立橋北小学校 一般本部) ・狩野 弘美 (渋川市立子持中学校 一般本部) ・櫻井理絵子 (玉村町立中央小学校 一般本部) ・多胡 慎平 (五木町立玉村中学校 一般本部) □講演会運営 <ul style="list-style-type: none"> ・講演会資料の印刷準備 ・講師紹介、誘致 □レセプション運営 <ul style="list-style-type: none"> ・会場担当者との連絡調整、映像準備 ・参加者の取りまとめ ・受付 ※群造美本部役員 	<ul style="list-style-type: none"> ■局長 博 (前橋地区代表理事、会場校前橋市立原小学校長) ■局員 <ul style="list-style-type: none"> ・高橋 浩明 (会場校代表、高等学校、荒砥中学校担当) ・蜂須賀克明 (県公立幼稚園代表) ・後藤 章 (会場校代表) ・林 恭祐 (会場校代表) ・滝沢 充孝 (高等学校事務局担当) ・藤田 幸光 (前橋市理事、荒砥中学校担当) ・金井 幸弘 (前橋市評議員 (小)) ・野田 邦明 (前橋市評議員 (中)) ・高野小百合 (前橋市評議員 (小)) ・村田いつみ (1分科会世話係) ・須永 幸男 (2分科会世話係) ・内藤 武志 (3分科会世話係) ・津藤 聡 (4分科会世話係) ・瀧間 京子 (5分科会世話係) ・谷 滋 (6分科会世話係) ■主な業務 <ul style="list-style-type: none"> □会場校運営 <ul style="list-style-type: none"> ・会場校の受付、街頭案内、駐車場誘導等 ・小会場校 ⇒ 前橋市主任会に依頼 ・他市町村評議員 主任会から応援 (原小4 荒砥中2 六中2) ・庄山美樹子 (藤岡市立美九里東小学校 ⇒ 原小) ・水野 愛子 (神流町立万場小学校 ⇒ 原小) ・布目雄一郎 (前橋市立西中学校 ⇒ 中1) ・高崎美術主任 (評議員以外の3人) ⇒ 中3 ・岡崎久美子 (伊勢崎市立境菜女小学校 ⇒ 原小) ・中村 幸子 (伊勢崎市立境菜女小学校 ⇒ 原小) ・高校会場 ⇒ 県高校関係者に依頼 □幼稚園運営 <ul style="list-style-type: none"> ・幼稚園会場 ⇒ 県幼稚園関係者に依頼 ・提案者、当日関係資料作成、授業準備支援 ・指導案、当日関係資料作成、授業準備支援 □分科会運営 <ul style="list-style-type: none"> ・各都府県提案者等の一覧表作成 ・提案機器の調査、調達 ・分科会進行のマニュアル作成 ・各提案者の事前打ち合わせ ・授業会場、分科会、校内案内等表示作成 ・会場校の受付、校外の案内表示作成 ・当日の案内
---	---

<ul style="list-style-type: none"> ■局長 砂田 尚美 (群造美副会長、高崎市立鼻高小学校長) ■局員 <ul style="list-style-type: none"> ・坪田 欣弥 (大会事務局局長) ・金井 咲子 (群大附属小 群造美事務局会計) ・大井 衛 (群大付属中 群造美本部会計) ■主な業務 <ul style="list-style-type: none"> □渉外 <ul style="list-style-type: none"> ・旅行社の選定、連絡調整 (JTB) ・参加者名簿等の作成 (JTB) ・参加者数 (会場別、分科会別) の各局長へ報告 ・一般参加者の弁当等の準備、回転業者との連絡調整 ・会場校との連絡調整 ・名札、領収証、食券一式の準備 (JTB) ・大会役員講師等の昼食注文、配送依頼 ・群馬県、前橋市等観光案内等準備 □会計 <ul style="list-style-type: none"> ・予算案作成 ・予算配分 ・予算書作成、執行 ・参加費徴収 (旅行社との連絡調整) □基調提案 <ul style="list-style-type: none"> ・基調提案の作成、発表 □全体会議演習用機器全般準備 <ul style="list-style-type: none"> ・パソコン、プロジェクタ、コード類一式 	<ul style="list-style-type: none"> ■局長 内藤 武志 (群造美副会長、伊勢崎市立極東小学校長) ■局員 <ul style="list-style-type: none"> ・黒崎 高行 (群造美高崎市代表理事) ・清水 賢治 (群造美沼田市代表理事) ・竹内 昭典 (群造美館林市代表理事) ・横山みどり (群造美邑楽郡代表理事) ・久保 俊明 (群造美甘楽郡代表理事) □編集委員 <ul style="list-style-type: none"> ・町田美也子 (高崎市立東部小学校) ・山賀 真志 (高崎市立寺尾中学校) ・石倉 里紗 (伊勢崎市立境菜女小学校) ・飯塚 恵慈 (伊勢崎市立宮郷中学校) ・館原 志恵 (富岡市立富岡中学校) ・中村 敦子 (富岡市立富岡中学校) ・中村 聡美 (館林市立第九小学校) ・鎌田 崇人 (館林市立第二中学校) ・小久保多美子 (明和町立明和西小学校) ・瀧藤 紀江 (板倉町立板倉中学校) ・堀木 秀郎 (下仁田町立下仁田小学校) ・小林松恵子 (甘楽町立甘楽中学校) ■主な業務 <ul style="list-style-type: none"> □大会案内作成 <ul style="list-style-type: none"> ・1次案～最終案作成 ・最終案内配送 (各都県事務局宛、県内) □大会当日の記録 (写真・録音等) □大会当日冊子作成 <ul style="list-style-type: none"> ・提案者等への提案原稿依頼 ・掲載内容、書式等、体裁の決定 ・公開提案者指図書原稿依頼 ・印刷業者の選定決定 ・大会冊子の配布準備、印刷部数決定 ・編集作業 ・全体会、各会場校受付の配布部数割り振り ・アンケート用紙作成・集約 □大会報告書作成 <ul style="list-style-type: none"> ・掲載内容、書式等、体裁の決定 ・原稿締着依頼 ・印刷業者の選定決定 ・報告書配布計画作成、発送 ・編集作業
---	--

<ul style="list-style-type: none"> ■局長 砂田 尚美 (群造美副会長、高崎市立鼻高小学校長) ■局員 <ul style="list-style-type: none"> ・坪田 欣弥 (大会事務局局長) ・金井 咲子 (群大附属小 群造美事務局会計) ・大井 衛 (群大付属中 群造美本部会計) ■主な業務 <ul style="list-style-type: none"> □渉外 <ul style="list-style-type: none"> ・旅行社の選定、連絡調整 (JTB) ・参加者名簿等の作成 (JTB) ・参加者数 (会場別、分科会別) の各局長へ報告 ・一般参加者の弁当等の準備、回転業者との連絡調整 ・会場校との連絡調整 ・名札、領収証、食券一式の準備 (JTB) ・大会役員講師等の昼食注文、配送依頼 ・群馬県、前橋市等観光案内等準備 □会計 <ul style="list-style-type: none"> ・予算案作成 ・予算配分 ・予算書作成、執行 ・参加費徴収 (旅行社との連絡調整) □基調提案 <ul style="list-style-type: none"> ・基調提案の作成、発表 □全体会議演習用機器全般準備 <ul style="list-style-type: none"> ・パソコン、プロジェクタ、コード類一式 	<ul style="list-style-type: none"> ■局長 博 (前橋地区代表理事、会場校前橋市立原小学校長) ■局員 <ul style="list-style-type: none"> ・高橋 浩明 (会場校代表、高等学校、荒砥中学校担当) ・蜂須賀克明 (県公立幼稚園代表) ・後藤 章 (会場校代表) ・林 恭祐 (会場校代表) ・滝沢 充孝 (高等学校事務局担当) ・藤田 幸光 (前橋市理事、荒砥中学校担当) ・金井 幸弘 (前橋市評議員 (小)) ・野田 邦明 (前橋市評議員 (中)) ・高野小百合 (前橋市評議員 (小)) ・村田いつみ (1分科会世話係) ・須永 幸男 (2分科会世話係) ・内藤 武志 (3分科会世話係) ・津藤 聡 (4分科会世話係) ・瀧間 京子 (5分科会世話係) ・谷 滋 (6分科会世話係) ■主な業務 <ul style="list-style-type: none"> □会場校運営 <ul style="list-style-type: none"> ・会場校の受付、街頭案内、駐車場誘導等 ・小会場校 ⇒ 前橋市主任会に依頼 ・他市町村評議員 主任会から応援 (原小4 荒砥中2 六中2) ・庄山美樹子 (藤岡市立美九里東小学校 ⇒ 原小) ・水野 愛子 (神流町立万場小学校 ⇒ 原小) ・布目雄一郎 (前橋市立西中学校 ⇒ 中1) ・高崎美術主任 (評議員以外の3人) ⇒ 中3 ・岡崎久美子 (伊勢崎市立境菜女小学校 ⇒ 原小) ・中村 幸子 (伊勢崎市立境菜女小学校 ⇒ 原小) ・高校会場 ⇒ 県高校関係者に依頼 □幼稚園運営 <ul style="list-style-type: none"> ・幼稚園会場 ⇒ 県幼稚園関係者に依頼 ・提案者、当日関係資料作成、授業準備支援 ・指導案、当日関係資料作成、授業準備支援 □分科会運営 <ul style="list-style-type: none"> ・各都府県提案者等の一覧表作成 ・提案機器の調査、調達 ・分科会進行のマニュアル作成 ・各提案者の事前打ち合わせ ・授業会場、分科会、校内案内等表示作成 ・会場校の受付、校外の案内表示作成 ・当日の案内
---	---

※群造美本部役員 (各局で係等の担当がない者)

□1日目の動き (各局) ⇒ 2日目 中

□2日目の動き (各局) ⇒ 2日目 原小

・萩原 憲一 (沼田市立南中学校) ⇒ 2日目 中

・福島 栄典 (沼田市立南原小学校) ⇒ 2日目 中

・大島 浩二 (館林市第五小学校) " " "

・田中 賢治 (館林市立第七小学校) " " "

・細矢 理左 (みなかみ町立月夜野北小学校) " " "

・山崎裕美子 (高崎市立滝川小学校)

編集後記

第59回関東甲信越静地区造形教育研究大会群馬大会報告書を作成するにあたり、記録・編集等の関係者の皆様に、大変なご苦労ご協力をいただきましたこと、まずもって深く感謝申し上げます。

「出会い かかわり つながる造形」をテーマに行われた群馬大会は、関係者と参加いただいた方たち、そして幼児、児童、生徒の力が結集されることによって、本当に素晴らしい大会にすることができました。当初の予想を上回る人数の参加者を得て、盛況の内に終えることができました。

本大会の成果が生かされ、造形教育がますます発展し、次の大会へとつながっていくことを祈念しております。

ありがとうございました。

(群馬大会編集局)

2019 第59回 関東甲信越静地区造形教育研究大会群馬大会 報告書

発行日	令和2年2月10日
発行者	関東甲信越静地区造形教育連合 理事長 飯澤 公夫 関東甲信越静地区造形教育研究大会群馬大会 実行委員長 吉崎 匠
事務局	群馬大会事務局長 坪田 欣弥 大会事務局員 豊岡 大画 群馬大学教育学部附属小学校 〒371-0032 群馬県前橋市若宮町2丁目8-1 TEL:027-231-5725 FAX:027-231-2828
印刷	有限会社 マルエー印刷 〒371-0016 群馬県城東町4丁目21-9 TEL:027-232-1684 FAX:027-235-1956